

演劇研究会編

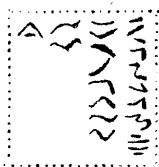
未刊淨瑠璃芸論集

おことわり

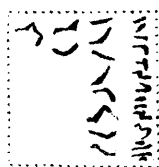
縦刻にあたり、なるたけ原本に忠実にと努力致しましたが、いろいろの都合で思うようにゆかず、二三不備な点が出ましたことを、おわび申し上げます。

曲節などもその一つで、文中のゴマ点など省略したところがあります。左に曲節の説明のうち、空白になった部分を記しておきます。

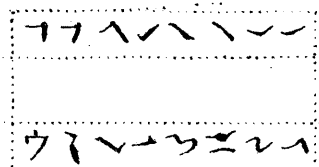
点線の所で切って、御貼付下さい。



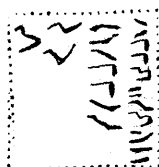
P. 7



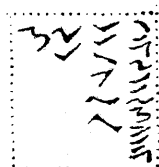
P. 3



P. 24 ~ 25



P. 17 ~ 18



P. 21

凡 例

一、本書は演劇研究会の共同調査による演劇資料の第一冊である。

一、内容は淨瑠璃段物集の序跋および伝書による芸論を集めた。本集は未定稿であつて、さらにこれを増補し、序跋・伝書・その他による淨瑠璃芸論の集大成を期している為、大方の御示教をお願いする。

一、本集の原稿作製および校正は、主として池谷、信多、津田、土田、角田、丸西、源、向井、森、柳原、山本、山根、祐田、横山が担当した。

一、校訂の方針はすべて原本のままとした。ただし漢字は当用漢字を原則とし、それ以外は従来通行の漢字を用いた。異体字、略体字もおおむねこれに準じた。

一、本書の翻刻資料については特に東京大学教養学部図書館、東洋文庫、天理図書館より多大の便宜を与えられた。深く謝意を表する。

内 容 目 次

「竹子集」序跋……………	一頁	「竹本筑後掾門弟教訓並連盟狀」……………	三三頁
「大竹集」序……………	五頁	「浄瑠璃千疊敷添柱」序……………	三六頁
「小竹集」序……………	五頁	「諸葛孔明鼎軍談絵尽」序……………	三六頁
「千尋集」序……………	六頁	「浄瑠璃加賀羽二重」序……………	三七頁
「新小竹集」序……………	六頁	「富松時計草」序……………	三七頁
「貞享四年義太夫段物集」序跋……………	七頁	「音曲縫小袖」序……………	三八頁
「紫竹集」(門弟教訓)序……………	一二頁	「音曲大和謨」序……………	三八頁
「当流浄瑠璃小百番」序・凡例……………	一五頁	「陸奥杣鎗笏」序……………	三八頁
「浄瑠璃小菊丸」序跋……………	一九頁	「豊曲不二笏」序跋……………	四三頁
「竹本極秘傳」凡例……………	一九頁	「音曲初日山」序……………	四九頁
「竹本秘傳丸」凡例……………	二三頁	「音曲莠大全」序……………	四九頁
「鸚鵡ヶ杣」序跋……………	二五頁	「競伊勢物語」序……………	四九頁
「翁竹(九曲卷)」序跋……………	二九頁	「音曲八の巻」跋……………	五〇頁
「鸚歌か蘭」序……………	三二頁	「音曲大湊」序……………	五〇頁
「國性爺大明丸」序……………	三三頁	「荒御靈新田神徳」跋……………	五〇頁

『竹子集』序跋

加賀掾段物集。加賀掾自序。延宝六年八月、洛東野夫造化軒跋。京都山本九兵衛版。

竹子集

一 淨るりに師匠なし・只語を親と心得べし・其子細は・先操はじむるに・翁三番神・扱能おはりてさがりはをはやし・人形出る・はつひ・半切・大口・いづれか能のしやうぞくにかはるや・然は淨るの根元は謡なるべし・第一は工夫なり・きえずはぐらずして・それ／＼に心をうつしかたるべし・万の道こゝろよりおこりて生ずるならひなれば心をそれになしてといふ所に眼をつくべし・されども此儘にては・初心の人合点ゆくまじければ・あら／＼しるすのみ

一 祝言・幽玄・恋慕・哀傷・此四音工夫の第一なり・祝言の時は・文字うつりなるほどたゞしく・ふとからずはそからずつよきを本とす・是諸音の地体なり・たとひ残り」第一の音をかたるとも・声はいつまでも祝言のこゑにて・心に思ひ入をかねて語るべし

一 幽玄は・祝言のこゑ其儘にて・吟をやはらげうき／＼と・只琴・笛つゞみなどを聞・花のもとに目をくらし・家路を忘るゝ心にて語るべし

一 恋慕は・幽玄の上に切なるこゝろざしを専とす・いかにも人に

うちもまれ・なつかしき心もち・ふかく思ひ入てかたるべし・思ひうちにあれば色外にあらはるゝ・しら露も紅葉におけるは紅の玉といへるがことし

一 哀傷の事・是は前のよせいをこと／＼忘れ・恋慕を少残し・よはくならぬやうに心もち・心底に無常を専一とするなり

一 惣而音曲は身がまへ第一なり・先わりひざにして・腰を二〇すへ頭をろくにもち・心は其儘意をちりけにおく・身がまへあしければ・こゑの出所あしく・諸芸ともに右の心得なきは・たしなみうすきゆへなり

一 ふし所を四機と云事・一には調子・二には拍子・三にふし・四には時の機・四音の位をかんがへかたるをもつて四機といふ

一 ふしが躰をもつ躰がふしを持といふ事あり・又拍子が程をもつ程が拍子をもつと云事もあり・よく／＼心得べし

一口舌心の音曲といふ事・口したよく叶ひ心のきゝたるをいふなり・此三つひとつもかけては有べからず・たとひ口舌よくかなふとも・或は座敷の禁句又わが得調子をわすれなどせば・其興あるべからず・よく／＼心得べし・口と」三さいふは文字あつかひあざやかに・すら／＼と自由にいひわけ・開合かなづかひを極め文字に実を入てしかもふつぎれもなく・かる／＼と語る所舌なり・心に万法こもるなれば・四音四機のきてん・万達者する所是心なり

一、惣別音曲は声にちからを忘れこゝろに力をもつべしとあり、尤なり哥に

音曲はたゞ大竹のごとくにて

すぐに清くてふしすくなかれ

此哥に心得あり・ふしすくなかれといへばとて・ぬら／＼と語るにあらずさだまりたる能ふしは何れもあるがよし・たけも有べきふしは何程ありても見にくからず・病竹やまだけなどにむさとしたるふしは見にくし・又庭木にはきのえだをいろ／＼にためかゞめつくりたるは・景氣きき「三三おもしろきやうなれども・はやく見ざめする物なり・只しづかなる太山やまの岩かどに・小松の自然に雨露うろのめくみをうけ・こけむしたるこそえもいはれず心肝しんかんにしみておもしろけれ・其ごとく淨るりも四音開合なづかひをきはめ・むかしより定りたるふしにて語らんこそおもしろからめ・しかれども我其徳ぞくあらざるゆへ外の音曲いまやうなどまじへてかたる事・まことにやまひ竹つくり木におなじ・さぞ心あらん人のおかしかるべし・さりながらさやうの人はすくなければ・只時の機あひだに応ずるを本意ほんいとする事・我身あまながらも浅ましく覚る

一、淨るりの中へ外の音曲入るとても・それへうつる所・又それより淨るりへうつる音・木にたけをつぎたるやうにてはせんし・とかくうつりをよく／＼工夫くふう稽古けいこ有べし」(三三)

一ふし所は勿論もちろん惣じて一番の内四音の位語り分る事専一なり・其位をしらずしてふしばかり専に語り・或はしやみせんの拍子はたに我拍子をとられ・たるみそゝるは・心意しんい外がにうつるゆへなり・然は身がまへもくづれ声も次第しだいに消る・此心得あらざる人・淨るりはかたらず・淨るりにかたたるゝにて有べし・淨るりは針はり・しやみせんはいと心得べし

一語にのもしもよのやみむといふならひあり・淨るりにも有べき事なれども・それ程まで心がけの人まれなり・只堅かたきかな・ひらくかなを・耳みみにあたらぬやうに語るべし・

一、今時淨瑠璃かたるをみるに・或は上面をそむき・或は人にせなかをむけなどしてかたる・更に心得かたし・但是は耳にて外の事を聞・目にて何事にてもみれば・芸の「三三」さまたけになるといふ事歟・たとひ何を見聞とも心意外しんいがいにうつさすんはさまたけと成べきや・右にあらはすことく身かまへを専にし・こゑをどうよりいださざるゆへ・顔にりきみ出色しきとゆがみしかむ・某か一流りゅうたらんは第一此心得こそ専一せんいつなれ・惣じて淨るりほど下輩げはいなる物のやうに人にいやしまるゝはなし・是皆みつから藝をあさまにしなしたるゆへなり既淨すでるりを能語り得てはかたしけなくも口宣くせんをいたゞき諸國しよこくの受領うりやうに任ぜらる・いつれの音曲にかゝる事やある・しかるをさやうの心得もななく・又四音四機しよんしき乃くらゐをありともなしともしらず・たゞうか／＼

とかたりちらすは・ねざししられ浅まし

地・地色・詞・ふし・しやうの事

一 地とあるは拍子ひょうしにのる・地色とあるはのらぬ也・されとも「四」のらぬと云所に大事あり・四音の位にしたがひたるますそゝらずして・長短ちやたんの地くばり張弓はりゆのことくしやみせんにあたらずのらずして・しかも能うつりそれゝの位をもつて語る是地色也

一 詞は常に物語することく其位おに応じ少もふしのつかぬやうにかたるへし

一 ふしはいかやうにも銘々めいめいの心に叶ふやうしかるへからんや・然共我等か心覚是悲御所望故あらまし書付候

一 此しやう謡のことし

一 此しやう持引

一 此しやう持はづむ

一 此しやう持はぬる

一 音情おんじやううく心こころ「四」

一 詞にもあらず地にもあらず

一 ふしながらあとの位をすてさきの位を改あらたむ

一 謡の打切の心か。是もさきの位をあらたむる

三 重はしるすにおよばす併其位なりををはかり人形のふりにこゝろをつくへし

此外あるへけれども筆におよばれす。とかくふしはいかやうにも語りやすきもの・只修行あるへきは四音の位長短うつり。分てむつかしきは開合かいがふかなづかひの口中敷

一 扇子拍子せんしは語り出すさきの位をしやみせんにしらせんためなれば一息いゝにうつものにあらず。さきのくらゐをすゝめんとおもふかしづめんと思ふ時はかりうつへし

右は大方座敷淨るりの心得。人形にかゝりては少「五」さちかふ事もあるへく候。諸藝ともにこゝろを付るほど。くらきより猶くらきみちに入やうなる物はなしといひつたへ侍る。尤かな理りかな。今此道を我とても九牛きうぎうが一毛いちもうもわきまへたるにはあらねども。いにしへ謡の仙いじりかきおかれし書物をのぞき。若かくも有なんと。かなはぬまでもこゝろをつくし書付進上申候。誠に鶴のまねをする鳥水をばのまで人のそしりをのむにて候はんまゝかならず他見たけん他言たごんいやにて候

加賀掾(宇治) 澄義

竹子集 撥

和歌に誹諧はいかいあり・詩に狂句きやうくあり・此ふたしなはことばいやしきに似たれども・其すがた六くさははなれず・幽玄ゆうげん有心のたえなること葉を親として詠よじ出すとかや・されば是になぞらへんは・三みつの御

神のおそれあれど・淨瑠璃の語をちゝはゝとして・万のふしぐと
 なるもしかや侍らん・いにしへには滝野沢角なん此みちのひじり
 にて・ほまれを雲のうへにも聞へあげしか・やをら末の世と成て
 ぞ・おのかじしかたりいどみて・十二音律もうつつなく・八のしら
 へもしらて・おのづからつたなきわざのやうにすたはてけん・こ
 ゝに宇治の何某とし月この音声に心をかたふけ・霞みだるゝ寒きあ
 した・和哥の松ばらにたゝずみて・田鶴のもろこゑを・もろゝの
 えならぬふしに思ひやり・霜こほる夕ゝおとなし川に
 逍遙」(跋一) して・三熊野の嵐に・三重のゑがたき響をさとり・や
 しのふ山のおくもみるべくなりにけるより・から衣きいの国を出
 て・玉手箱三とせあまり・花の都人にまみへておもてぶせともなら
 ざるなる・此みちのちぎりふかく薬師如来の尊号にかなひ淨りの
 ひかりをみかき得たるにこそ・奴倅又朝なゝゆふなゝ此むしろ
 にあそびて・なれかたらふ事とし有き・いかなる雨の中にやありけ
 ん・世の人のかたりもてあそぶ淨りふし所ゆり所・露たがふ事はあ
 らねど・いかにそや吟声すなほならず・聞人其情おこらず・無下に
 こゑをついやすのみ・ねがはくは此まよひをとき給へとかたらひし
 に・こまやかなるふしぐは口づからつたへてたに・たやすくうた
 ひとゝのひがたし・只淨りのねざしをみせめて・此甘のことく
 さを筆し・手づからみづからふしをさへくはへて・先輩のいまだ発

せざるを・竹子集に」(二) つどりてさづけ給ふ・やつかれ是を珍と
 し重とし・千たび伏仰して觸察するにあかず・あなかしこふところ
 にのみせしを・銅駝坊の書林九兵衛のぬしまめやかにこひうけてつ
 るに・梓にちりばめんとすれば・虎口のそしりをまねくのおそれ・毛
 をふくにちかしとしゐてとゞめ給へども・よこしまの非はさもあら
 はあれ・しる人ぞしるとうちずして・予があちきなきさすみをしりへ
 にして・ゑぞがちしまのますらお・松浦川あゆつるおとめこまで・
 此道に心をよする人に・あまねくあたゆるにぞ侍る・久かたの天下
 に音曲のはまれ有もの・催馬楽のうたひものはさらにいはいはじ・今
 様朗詠はいともかしこし・何れか諸国の大目ずりやうなど宣ひくだ
 して玉のみぎりに候する事・たらちねのおやなるうたひよりはしめ
 て・何の音曲にかかゝる事やは侍る・されば竹子のおやまさりとい
 ふ世話」三三にたよりて名付たるにも・又あまたのふしのこもれる
 心にも物まざらはしふあめれど・うたひを親とせるなん淨りの命
 なれば・おやまさりのたはふれやなをちかくは侍らん・もとよりま
 ざるみちとはいへれど・親に似ぬはおに子なれば・うたひをわきま
 へずして・おに一口にかたりちらさんは・そらおそろしふこそあめ
 れ・干時

延宝六年戊午 秋八月洛東野夫造化軒撥筆圓

二条通寺町西へ入北側

『大竹集』序

加賀掾段物集。延宝九年六月、加賀掾自序。

延宝九年六月下旬刊。京都つば屋吉左衛門版。

竹の子のすぐなるおいさをみるとすれば智くらふして至りがたし若竹のさくやかなるふしのみだれにたはふれんすれば心まぎれて迷ひにちかし爰に此おもひを懷て師にむかふ師莞爾としてよいかな問事百千のふしはかせも只甲乙のふたつより出れば前集のことばこそ始のをしへにして終までのならひなれそのこま」こまやかなるをいはゞ八百日行濱のまさごも取つくしつべしいはねば愚なるがことし何をもつてかこたへん是なめり始終本末間に髪を入ずしてまたさらに胡越をへだつとは汝其中の妙をえんとおもはゞつとめて至れ自然にしろべし五柳先生か絃なき琴を愛せし其心ざしのしらべこそなつかしけれと云てたなごころをうつてさり」こま給ひぬ予語しておもふに孟母のはた物はきりても猶人をすゝむ我うつゝものつたなくして得かたしとて此金言をもださんもさう／＼しければかのふたつの巻／＼にもれたる又古きをも添て師が正筆のふしをうつし大竹集とほのめかして世にあまねからしむ橋をわたして衆人を救ふの謂かおこ／＼しくこそ侍れ嗚呼淨瑠璃の」こま奥秘たる師はこれを得

たれども説ず我はそのむねをうけてとけども又こゝろに得ず後の人こゝをおもへ

干時延宝辛酉夏六月堅日自序

加賀掾校合⑨」二ウ

『小竹集』序

加賀掾段物集。貞享二年七月十六日、西鶴序。

貞享二年八月六日刊。大阪森田庄太郎版。

東西／＼淨瑠璃はいやしき物とて世に捨草の種なるを宇治加賀掾一流を語るに聞に万事の吟味謡にかはる所なく人のなくさむ業となりて七本骨の拍子扇子を貴人の手毎にふれられし事」こまにそすゑ／＼迄も今といふいま耳に穴ありてよき事を聞覚え外なく嘉太夫口まねをして月待下舟小風呂のうちにても此一ふしのやむ事なし我も老楽の何がなと思ふに鞠に足はよく楊弓に眼定」こままらす時に大竹集を求めて明暮是を見しに懷中のならざるを用捨して節章を改め小竹集に移しぬ是なん小は大を叶へる一冊也

貞享二乙丑年 難波

七月十六日

西鶴 (瓢印)

永鶴

(二才)

『千尋集』序

義太夫段物集。如水序。貞享三年十一月下旬。

声は在^{あり}三樹間^{さんじゅかん}一鳴呼秋^{いちめいこ}の声なりと聞^{きこ}わくるも調子^{てうし}にあらずや宮商^{みやしょう}角微羽^{かくゑう}のはなるゝはなしされは岐^{あまた}にうたふ此御代^{このごだい}とて或は観世進藤^{くわんせいしんとう}を声^{こゑ}にあげ或は幸若臺頭^{きやくわくだいとう}をうならすしかしより」二今當淨瑠璃^{いまあたうじやうるり}にぬれ声^{こゑ}のやさしきもさることなり爰^{こゝ}に竹本義太夫^{たけもとぎだうふ}とて一ふしの祖^そありつよからすよはからすえんにやさしく五つのひゝきをはなれぬは又実^{じつ}もたもてりこれによりて上はゑほし」ニウ冠^{かんむり}の座^ざにつらなりて三十一字^{さんじゅういちじ}の吟声^{ぎんせい}に交り下は玉鉾^{たまぼこ}の籠^{かご}かき足引^{あしひき}の黒木売^{くろきうり}までも是^{こゝ}を学^{まな}ばぬもなし須弥^{しゆみ}を芥子^{かいし}に入るになぞらへて千尋集^{せんじんしふ}も懷^{おも}ひの中にとて如水序^{にすいしよ}」(二三)

『新小竹集』序

加賀縁段物集。蘆華亭南鴻序。貞享三年七月吉辰刊。大阪 清兵衛版。

洞簫^{とうしょう}の曲^{きよく}を吹^ふて幽壑^{ゆうこく}の潜蛟^{せんかう}を舞^まひ。孤舟^{こしう}の嫠婦^{りふ}をなかせしといふためし。今宇治加賀掾^{いとうけがでん}といふ雅夫^{みやふ}其精英^{きえいしやう}の仁傑^{にけつ}にあたれるものか。其声^{そのこゑ}轉^まとして喜怒哀楽^{きどあんらく}の情素^{じやうそ}を動^{うご}かし。其節^{そのふし}」(一)一 嘯^{おう}として祝頌^{しうしやう}嘉儀^{かぎ}幽玄^{ゆうげん}慕懷^{ぼくわい}旧闕^{きうけつ}評^{ひやう}等の諸曲^{しよきよく}かたる事已^{ことごと}にこまや

かなり。されば此太夫^{このたうふ}の自知自得^{じちじとく}の本ふしを世^よにても興^{おこ}ずる事。今まさにさかんなる花^{はな}にざわへる市^{いち}のごとし。よつて」二今好者^{このすきしや}稽古^{きこ}のために諸竹^{しよたけ}のあめる書多^{しよた}し。其闕漏^{けつろう}せるものをあつめて新小竹集^{しんせうたけしふ}となして。かかねて好者^{このすきしや}のためにあまねく弘通^{くわうつう}するものならし

蘆華亭 南鴻 賀保 (二三)

- (一) 百万遍
 - (二) 同
 - (三) 頼政
 - (四) 同
 - (五) 同
 - (六) 同
 - (七) 同
 - (八) 同
 - (九) 女武者
 - (十) 同
 - (十一) 和氣清麿
 - (十二) 世継曾我
 - (十三) 同
 - (十四) 三社託宣
- 一の内親王^{ないしんおう}さがの花見名所^{はなみなしょ}づくし
俊貞^{しゆんしやう}びくに道行^{みちぎやう}
初段^{はつだん}せいぞろへ
さしやうもん
はや太^たつな引女^{ひきめ}ばうとせりふ」(二)二
うち名所^{なしょ}もんたい
扇^{あふぎ}の芝草^{ししかくさ}かりのかけあひ
たつ田^たのまへ道行^{みちぎやう}
せいぞろへ
とら御前^{ごぜん}みちゆき」(三)三
西国^{さいごく}名所^{なしょ}馬^{うま}のだん
馬^{うま}そろへかりばのかうみやう
十番^{じふばん}ざり
みやめぐり

〔七〕徒然草

はなうり

ふしはいかやうにも銘々の心に叶ふやう然るべからん然共心寛
のためあらまし書付候

此しやう謡のごとし

此しやう持引

此しやう持はつむ

此しやう持はぬる

音声うく心

詞にもあらず地にも非ず

色

ふしながらあとの位をすてさきの位を改むる

スエテ

謡の打切の心か是もさきの位を改むる

ヲクリ

三重はしるすに及ばず併其位とをはかり人きやうのふりに心を

つくべし

此外あるべけれ共筆のおよばれずとかくふしはいかやうにもか
たりやすきもの只修行あるべきは四音の位長短うつり分てむ
つかしきは開合かんなづかひの口中か
地とあるは拍子にのる地色とあるはのらぬ也され共のらぬとい
ふ所に大事ありとぞ」(四二)

『貞享四年義太夫段物集』序跋

義太夫段物集。貞享四年一月吉日、義太夫自序。
山本九兵衛殿。京都・大阪山本九兵衛版。

自序

おほみや人はいとまあれや。桜かざせし春のけしきこそおかしけれ。人のふせい心ばへはさら也淨るりのすがたも皆。花にもるゝ事なし

しかれども。花にも老木あり若木あり。わか木は色も匂ひも時めきて。ゆうにめでたく蝶鳥のたはふれ。人の心うきたちて。ありし夜の曙ねやのひましろくみへて。はや明行」序一おくかとをどろきし。花のひかりもわりなくこよなく身にしてみて。床しく恋しきしなふならずや。いか成名木も老木となれば。色うせてかすかなるにほひむかしなつかしう。心の味斗にて。見所少くなりゆくもまたかなし。敷嶋の和歌の道も。花実そろひたるを名哥とは申とかや。淨るりもしかり。然れども今様の物にして。人をなぐさめ聞を悦しむるたねなれば」二花七分。実を三分にかたらまほし。いせぎくらのこちたく。とらの尾のあつてゑたるよりも。ゑと桜きりがやつたんだの。あざやかに咲なかれたるかげには立よる人もおほきぞかし。谷の古木に一りん二りんちらくと。咲たる花がしゆせうなるとて。

わか木のうちより。其ごとくにつくり立たらば。木もかしけ。花のりんちいさく。見所すくなかるべし。淨るりの姿も。只ゆうに大やうに。わか」三つやかにだてをもちしてかたりたきものなり。さほどに心がけてさへ。門松の数かさなれば。我もむかしのわれながら。時の氣にもあはず藝ぢいさく。聞人も精つきぬべし。此比いつの夜にかありけん。常にしたしき人の来りて。淨るりの伝授をゆるせよといへり。われこたへていはく。もとより近代の物なれば。誰よりつたへたるといふならひさらになし。しかし。音曲はもとひとつにて。五音十」三つ二調子の外を出ず。さか木うたふ神樂。梁塵秘抄の鄴曲のうたひもの。舞。謡。平家なんどの伝授を。淨るりにあづかりて。伝授とはする事也其身よくかたりて人にもほめられ。世にゆるされたらん人のいふ事は。かならず秘伝たるべし但人をそしりてわが利口をいひ。名人とおもはれんと思はゞ。いにしへの名匠の。つくりをかれし謡の書に。花伝書とて。家々の秘書あり。」三つ是に音曲の秘事ことごとく見えたり。或は男ばかせ女ばかせ。める字はる字。うむ字等の子細ひらくかな。すばむかな。程拍子。五音開合かなづかひ。四音四機。其外ありとあらゆる事さまゝのならひ有。かやうの事はいはねども。人の師匠をし。世にもしらるゝ程の身にては。誰とても一通しらねばならぬ事也。今又申沙汰せんは花伝書の抜書。われこそ伝授事しりたりがほ成もむ

つ」三つかし。稽古の修行なく伝授はかりにてかたたるゝものにてなす。其伝授に合せんとすれば。口中からみ。こゑにくげにてすなはならず。聞にくし。修行つもりて上手になれば。ひとりで伝授にかなふもの也。されば上手をにせよ。上手をにするなど古きをしへにも侍る。たとへ奉るも天のとがめをそれおほけれども。雲のうへの古今御伝授も。歌のよみかたのけいこには。さのみ用に立がたし。只心を」四つたしかにする為と。なにの一位殿は仰られしとかや。淨るりにかぎらず。大事といふ事。一日一夜にもならへばしりやく。年月つもらねは。身になす事かたしといへば。又とふていはく。淨るりは謡を父母とするといへり。しからば先謡をならひて後淨るりを稽古すべきかと。こたへていはく。それは面々の得かた有べし。われらか一流は。むかしの名人の淨るりを父母として。謡舞等はやしなひ親と」四つ定め侍る。しかし親の心子しらず。一ぶん／＼のきてんにて口拍子。心拍子ふし詞の心持。しやみせんものり。あしらひ。聞人のうけいろ。ならひの外才覚也。とかく打きゝたるふせいやさしく。みくにあたらず聞ぎめせず。淨るりの本舞をわすれず無理ならぬやうに。あやつりにては人形にかなひ。座敷にては其一座のあいさつさし合。ともかくにも。人の心おもしろく。あかすなくさむるを」五つ伝授とも秘事共上手とも名人とも申へし。能ほど大事のものはなけれども。高砂の明神に足拍子は何事ぞ。

人の心をなくさめん爲ならずや。われらがならひ。多く聞て疑しきを
闕て。其余を用るときはあやまちすくなしとかやいへる。聖人の金
言にすがり。幼きより聞なれたる。よろづの音曲の。よきと思ふふ
しをあつめて増減し。心をくはり。家々の口伝をひそかにつたへ
て。至る。一流となし。我もかたり他にもをしゆる事になん侍る。
只名人をねがはずとも。上手にならんとばかり稽古する。是予か
一大事の心がけなれば。是をや秘伝とも申べしといへば。感する人
もあり。笑ふものも有し。道に入て道を味へば醍醐其かぎりをしら
ず。甘露かへつて淡しとす。詞筆につくさめやあゝ友もが
な」(六)

淨瑠璃大抵

初段之事付り恋

一序の内ヲロシ迄は一番の内の式三番也。或は謡より出。地より
出。ふしより出る。心持かはるべし。調子は大やう一越
可也。いかにもあざやかにはだれたる糸をさばくやうにかたる事也。
見物の氣をしむる習ひ有。段切五段共に大事なれども。初段の段切
ことに大事也。初日の初段は子細有事也。恋慕の事」(六)しのびな
どゝてむかしより一通ある事也。たゞ風俗を大事に。心をつよく詞
をかるく氣をしはれてかたる也。女方の迫付いやにならぬやうにか

貞享四年義太夫段物集

たるべし。恋なりとてやはらかにかたれば。もたれてうるさし。せ
りふは川瀬のごとく。ふしは淵のごとしといふならひあり

二段目の事付りしゆ羅

一初段の位をはりとかへて。めいらぬやうにかたる」(七)さかろ
き位也。しゆ羅の事。古播磨大夫の秘藏せられし口拍子有。聞人もこ
ぶしをにぎる様に氣をたるますかたる也。緩急。急緩。といふ事
あり。舞詰の類。口はやくは心を静に持へし。口の重き所は心をか
ろくうきたちてかたるべし口伝

三段目の事付り愁歎

一上りのこなしあやつり立。三段めをまなことして。能ならば
曲舞也。但淨るりの趣向に」(八)よつて何の事もなき事有しかれど
も位を付て三段目にしてかたりこなすならひ有。惣じて三段めの
位とて別にあり。君臣のはかせといふ事末に記す。愁歎の事。真実
をわすれず。一番の淨るりを胸にこめて語る事也。心の持やう甲乙
の習ひあり。口説。物語。過去。目前。感涙。等しなく差別有
口伝

四段目の事付り道行」(九)

一間を広くもたれぬやうに語るべし。淨るりも大様むすびに成。
人の氣も尽る比なれば少ももたれてはあし。道行の事ふし事の第
一とする也。貴賤老若男女。長道中。一日路。舟路。山路のか

はりめ有り。されども是は心持ばかり也。しやみせんに打そひてやさしくかたる也。序破急の三段序の急。破の破。口伝まち／＼也。但しやみせんにうちそふといふ事そふにあらず。拍子にはまるといふ「スウ」事。逢といふ事工夫有べし。

五段目の事付り問答

一番番のく／＼りなればむつかしき物也。去ながら五段め斗は淨りの趣向次第のもの也。位は祝言也。凡初段は絹。二段めはうらぎぬ。三段めはもやうそめ色うはゑぬひはく。四段めはいとわた。五段めは仕立也問答詞の事みな／＼狂言也。公家武家士民町人敵役女若衆。仏神の託宣。わけて大事有「九」但鉢の字。用の地と云事有り。忽じて是にかざらず。畢竟ひとり狂言の物まね也。鳥類畜類水の流。風の音有情非情迄。口にて其けきをうつす事也。しかれども牛をうしのこゑ。はらがいははらがいのやうに。むさとまねてふしを付る事。あてじまひとてきらふ事也。表裏の物まね有表とはわざをまねる裏とは心をまねる事也ゑしやく有べし口伝有り「九」

一はまる拍子逢拍子

「持はまるといふ

△ものおもふ身は 今さらに

余 准レ之

「不持逢といふ

一たてぬきのふしといふ事有り。織物のごとし。さればこゑのあやをなすといへり

△此比なれししほかせももの思ふ身は今さらにみ／＼にきひしく身にしむ夏こそこゝよ。

一君臣の事。淨るりは君。しやみせんは臣也。ふしにも「十」君臣のふし有。たとへば

△わけおくてなかくてかるたや「一二三

△けふりのすゑを見わたせはいせの海つらへう／＼と

一素淨るりの事しやみせんはひきてあやつりなしを云は誤也
実はしやみせんなしにかたる事を素淨るりといふ也

四歩六歩至極の秘伝

高宅尺の物を始五寸の内に七寸かたり末五寸の間を三寸にかたる事有り又はじめ五寸を二寸五分にかたり末五寸の間を七寸五分にかたる事有しやみせんあひの手又あしらひ共に淨るり斗にてしやみせんの間をかたる事也。一挺鼓同意敷秘か中の秘なり

一地詞ふしの事 地は水のごとし詞はながれのごとしふしはよどみのごとしといへり猶口伝。」

一風俗と風情と云事

一六義と云事

一こゑの出所の事

一 三重本末真行走の事

一 扇拍子の事

一 色のならひと云事

一 句切といふ事

一 呂律と云事」(十一ウ)

一 五行の心持の事

一 ふしに左右前後有事

一 陰のふし日なたのふしと云事

一 常平生といふ事

一 淨瑠瑠と云事。付りふしつけやうの事

右十三箇口伝

貞享第四孟春吉日 竹本義大夫書之」(十二ウ)

目録

一 主馬判官盛久 あげばのむまこうた

一同 道行并地ごくのゑとき

一同 源氏大系図

一 今川了後 ちどりのまへ道行

一 忠度 一の谷名所づくし

一同 菊のまへ道行

貞享四年義太夫段物集

一同 鍛冶銘づくし

一 佐々木大鑑 待宵時雨道行

一 世継曾我 けはひ坂并道行

一 以呂波物語 いろはのまへ道行

一 藍染川 弁の君みちゆき

一 東大全 だての姫道行

一 遊君三世相 春姫道行并文車

一 七騎落 頼朝みちゆき

一出世景清 をのゝ姫道行」(十二ウ)

(本文略)

(殿初丁久)

みとせは爰に出見世して。舟にくだり陸を上る事たびゝ也。或は川御座に足をのばして。大和路河内路。あたご大ひえ見たい所一めに見ながして。世界の樂してつく時有。いまふせは急用によろしく。夜船はぬるまをとりとし。三十石の乗合。誰が内義も遠慮なく。をし合へし合心やすきを思出とす。又陸地はうちよりゆくも有り。馬は荷のうへ次駕籠に氣をかへ。通し(殿ニモ)駕籠に心をのぼす。往還のしなまちゝなれど京より大坂十三里の道。のびずちゝまず。つく所は塙筋 高麗 橋にぞ有ける。淨るりのふしゝ其ながれゝのあやは少かはれども。上手の至徳なんぞ道理にふたつあらんや。

道にかなひ玉ふ人との参会には。さぞうなづきあふて。尤より外はあらじとこそをしはからるれ。やつかれ愚父が家業をついで。淨るり正本のはやし板行の森。其枝葉難波津にしげりて」三三六十余州に知人得たるもまたたのしからずや。されは古今高徳の大夫が手に残らずちなみて。新板をひろむる事数年にあり。身を立名をおこすは一藝の徳也。書は万代の鏡なり。一字のたがひ百万のあやまり其つみのおもきををそれ。たびごとに直の認本をうつし。口伝を直に聞て。千たび校合し。百たび琢磨し。墨紙をゑらふも道を思ふがゆへ也。しかるに此比類板の塵芥ちまたにみち」(三三)。或は。山本といふを山木とかすめ。あるひは板本を略し。あたひのひろきを以てあやぶめんとす。其書たるをみれば。衍文錯簡ふし認のあやまり。かぞふるにたらず。あゝ一字は千金也。書のあやまりをもつて。大夫のあやまり藝のそしりとならん事をうらみて。愚が板行の正本には。大夫在判をしるしとなし侍る。自今以後まぎらはしきをあらためて。用ひ玉はゞ。をのづから淨るりのけいこ。あたかたなごゝ」(三三)ろをさすにおなじからん。今太平の君が代。貞享四つとしうのはがさねの初春。洛陽銅陀坊の書林。山本九兵衛つしんで跋す

京二条通寺町西へ入北側

京正本屋

大坂かうらい橋堺すちかど出見せ

山本九兵衛板行

『紫竹集』(門弟教訓) 序

加賀掾段物集。元禄十年八月、加賀掾自序。京都山本九兵衛板。

門弟教訓

凡乎一流の淨瑠璃は謠狂言の音勢を父とし草紙の文勢を母とし修行する事四十余年四音仮名開口清濁を宗としそへらず緩まず節拍子にかゝはらず只位はかせ程うつりもちりはこび持合引廻し色うきあたり舁用長短等の故実をふまへ詞地色地ふしの品をみがき流義を究む拍子は是身より出る」(二)惡心程は外よりすゝむる善心善をもつてみがき伝をもつてすゝがずはいかで淨瑠璃の光耀音曲の眞理にかなはんかゝる差別も弁ず己が声拍子にまかせ或は他の惡拍子に位をうばゝれみだりに語りちらすは偏に本心を忘るゝ狂人共いひつべし又習はずして草紙のふし付を見或は又聞語にするは是売僧淨瑠璃と云成べし諸藝共にか程利口發明の人とても口伝をこり受ずして道に叶ひ劫至る事有べきや藝の奥底かぎりしられず必はむるにのらず卑下をなし雲井の月貴賤の老若男女海中の龍魚鳥畜風雨滝川の音迄に心をよせ猶懈怠なく修行有べきもの也

元禄十年

丑仲秋日

徳田加賀掾(電話) 〔字訓〕 〔落義〕 (二)

此門弟教訓予六十三歳の秋、（しにいひるゝ）故七九集と書たけれども、前々の題号の竹の縁あれば紫竹集とあらはす也」（二ウ）

延宝六年の秋、竹子集其以後大竹集、竹葉集など予一流の淨瑠璃の語様しるしぬれば、今又あらためん品もなけれども六十三に及び露命はかられねばせめて古き弟子共に我死後のかたみにもと思ひ元禄十年仲秋に門弟教訓の一紙ををくるしかるを銅駝坊書林九兵衛折節、揃新板催すの間、其序にと是非望によつてもだしがたく加筆せしむるもの也」（三ウ）されば竹子竹葉集に事あらはすといへども其品心にかくる人なきにや只生付たるうは声にて引まじき所を引まはすまじき所をまはし一息く／＼に扇子をうち拍子にか／＼はり文字のきゆるも、仮名のにちあふもまして位はかせもなくめん／＼の我流と云物ならんかしかなしかな我死して後はわれがちに成淨瑠璃の本意を失ひ、数年の修行あだにすたらん事こそ」（四ウ）口惜けれ末の世に此道すく人あらば集の断をかんがへ拍子をみがき文句明らかなとかく、仮名の消ぬやうに地色詞に拍子なき物なれば扇子打事なかれ地ふしにさへしげきはかしましいやしゝ

一藝に器用の無器用、無器用の器用、有器用の無器用はならふ、覚ははやく忘るゝ事又はやしこれ無器用にをとる也、無器用の器用はならふ事」（四ウ）をそけれども忘るゝ事かたし是誠の器用也、人毎にすゝむ拍

子とたゆむ拍子有すゝむ拍子はさしあたりよきやうなれども、ゆうなき故わるしたゆむ拍子をみがきぬれば、本間の拍子になる是をゆうのある藝といふてよし、勇力の人はずゝまずたゆまずおどろかず武藝はもちろん、音曲筆の道皆同断とかや

一藝の下手にかぎり人のそしるを立腹すこれ」（四ウ）あやまり也、口惜くはなど修行せざるぞ、そしる人は我身の師と思ひそしらるゝ所に心を付常によく修行し、合点ゆかはずは尋聞べしとふは一人へのはちとはぬは万人への恥なるべし

一淨瑠璃は段々長き物たとひよく語りても、数段の中にて只一字あやまりては能語りたるにあらず千ばいのうるしの中へ蟹の足一つ入とやらんなるべし」（五ウ）

一節付しやうを便りに語るは、大き成ひが事それにて成事なれば、謡の本程委細にしやう付たるはなけれども、ならはずしてうたふと云ことなし、先わけしらぬ淨瑠璃を聞に平安城の道行なれば、はたるもわれが身にそひてと語る内に、四所持有予が一流には一所も、もつ事なし、是皆悪拍子のなすわざ、淨りはかたらでしやみせんをかたる成べし、地くばりによりもたでかな」（五ウ）はぬ所こそもつべけれ、謡も下手のうたひは芭蕉の曲舞なれば、水にちかきろうたいはともちうたふ是皆習はずして生付たる悪拍子のなす所、是にて思ひしるべし

一位はかせは上一人より下万民一切の生類、風雨、水、音、迄にあ

る事也程と云はそゝらずたゆまず是を本間拍子と云うつりとは拍子より程に移り程より拍子にうつり地よりふしにうつり」(六)外の曲より地にうつり地より外の曲にうつるをいふもちりとは拍子を程にもちり程を拍子にもちりたゆまずそゝらずしてみちんも由断なきをはこびとしるべし

一持合廻しと云は地ふしにある事也或はふし送りみきははとゆる所みさきにすゝめどもまだ曉あけのと語る所皆是持合廻し程うつりもちり也雲のまゆずみほのかにても同前鏡」(六)山又しやんと立たるみかみ山皆定るふしなれ共文句がふしをもつ文勢を母とすと云にて合点せらるべし或は又スヘテ文勢にてさまゝかはれどもゆきかたはかはらず此外ふし所のとめいづれを聞てもすはらず只可べく盃ちやうをみるやう也

一我幾年語る数百段の淨瑠璃いづれか易しと思ふはあらず中にもむつかしき段八曲有一小原御幸二身延三管承相四松風」(七)五明石卷六花子七草刈八葵上是也。

一すべて諸藝をたしなまんに酒宴遊興色欲にふけ他念ありては中と上手に成がたし只一心に其道に打なづみたとひ月を見花をながむるとも道の心をわすれず寝ても覚ても由断なくてこそ他にすぐれめせつな憊怠げだは一生のけだいとしるべしされども悪にはうつりやすく善にはもとづきがたししりぞくものは大」(モウ)海のごとしすゝ

むものは一滴のごとしむへなるかなゝ

一一生夢のごとしといへども修行の間を思へば年久し既我十七歳の春あはれ世上に名を発する藝をあたへたと三十番神へ祈誓をかけ年来諸藝の家に出入し其道を見聞に丹誠をつくす者にも其家の子ならねば秘事を伝へず然ば望たりぬべき頼も「へさなし迎心をつくし修行するならばたとひいか妹の藝にてなりともと淨瑠璃に心をよせぬれどもならふべき師なしたとひ師なくとも音曲の法を守りうすきをあつくしをもきをかるくしみがくに甲斐のなからんやと思ひ謡狂言或は平家舞小哥迄の音勢を窺ひたゆむをすゝめそゝるを引しめ終に我一流の淨瑠璃とす親類のいかり朋友の異」(八)見わらひそしるといへども念願むなしうせんやと難行苦行し四十一歳にて京都に出芝居を取立今年二十四年つゝがなく相勤む道に達せしとは更思はねども或時は高位高官の御前に召前代未聞の御褒美に預り又は国主仏者儒者音曲者にも謗をうけず愚藝といへども他念なくつとむ故仏神の御あはれみと有がたしかくの「九」ごとき多年きざみはたきせんじしり修行し淨瑠璃の難病を治する薬方ををろかにし法にもあらぬ毒をこのみ或は自身手合の悪調丸をもつて、剩予が直弟子と偽る者世上にはびこると聞は則売淨瑠璃と云成べししかはあれど弟子にもあらで弟子と名乗も予が面目にもやあらん聞人御ひいき頼入存候以上」(九)

『当流淨瑠璃小百番』序・凡例

筑後掾段物集。筑後掾序及び編。大阪山本九兵衛版。

自叙

友とする人ふたりみたり厄言のはじめをはりもなく四方山の折ふしごとに、うつりもてゆく気色人の世も猶さらなり、其心もまたひとつに住する事なし、鴛鳥あかずきこのむ物きのふにけふはかはりゆく飛鳥風の、無内に時日を失ふともがらは、博奕をだも用ひずんば有べからずと、子ののたまひしごとく、心をたゞに遊ぶる人こそうたてけれなど、物がたりする中にも、さだ過たる客人微笑していへらく「兄一詩哥の席、管絃の床、堂上の様もてあそびをはじめ、いひしらぬしづのおまでもいまやうのうたひもの、治世の音声をあらはし、万代をよばふ中にも、當時淨瑠璃隆盛にして、巷を過る法師小童、頑愚言まじりなるも其一ふしの流儀はをのづからそなはり、少し心えたる品は一座の興を催し、門弟子をあつめ月なみの会合に、天性音声よきは処ゝたがひめあるふしもおもしく聞なされ、其座の功者としられたるも小音にしはれぬるは素人の耳に逆ふもあり、たま／＼右のふたつを兼備したる人」(二)あれば、芝居をつとむる直弟子よりはまさりなんと誉あげらるゝ器量も、それと

当流淨瑠璃小百番

よばれて大夫号を得し人には、かけずけをさるゝ事ぞかし、其中にとりては又次第階級有てよしあしを沙汰し、常芝居の脇大夫にはをとりたりといひなすもさる事ながら、今の世は耳かしこく口鈍く、聞人は上手にして語人は下手なりと、ある人のいひしもげにさる事ぞかし、拙も年ひさしく聞人の名人にて、語人の下手成しが、近年の淨りり惣麻のふし地はこびなど大きに違ひたりと思はるれど、中分の上手とき「三三こふる人も以前の蟬丸盛久の位にねばく、語りなす事はいか成ゆへぞかしとたづねられて、下官止事を得ずしていやとよ過しとしごろにいまとてもかはる事はなけれ共、序破急の心得、左右前後、長短方円、七分三分のわかち等をふとくせぬからの事なるべし、此品とはそれのとし直伝の書にあらはしたれば今更いふに及ばず、新淨瑠璃のかはりめには直本を高麗橋壱町目山本氏に渡し、版行せしむる事なれば其ふし付のごとくかたり給はゞ、さしたる事もなけれども他の耳に違ひたりと聞ふるは、其ふし付のごとく語り」三三えぬ故にこそ、假令は初段に扱も其後と語出事一文字を引がごとくしたることながら、此一点よりも／＼の文字成出る事なれば、筆法家のならひとすることく、初段のてうしその一日五段(以下原本稿讀第ニヨル)のくらゐをとり、心うる事なれば、第一の掟とし侍りぬ、其外大小の三重七情のこゝろえ、種々様々のわかち有といへども、かたりければ自然と他の耳に其のあや聞しら

るゝものなりと、酔心よしんのあまりにいひつゞくれば、客人きやくどあまたゝびうちうなづき、美玉びぎよくこゝにあり」（三）なんぞはこにをさめんや桜木にちりばめて、人のこゝろの花とさかしめんと、せちに望まれて既に三帖さんてうとなして、当流淨瑠璃小百番たうりゅうしやうりひこひやばんとえぼうし名づけをはんぬ。このとしこの月三陽さつやうの半、花果敷榮かうくわふきえいし、黄鳥くわうてうの声あやなせり、時なるかな（以上補寫）これこの時、

竹本筑後掾

藤原博教書之「教博」（三ウ）

淨瑠璃凡例

発端五言之事

一 いにしへは十二段の半数をとりて六段とし、中比なかひらより五段とし、其一段の発語はつごそれ／＼にかわりたる詞、大かたの人しりたる事ながら、小童のために書あらはし侍る、藝は浅きより深きに至るをはいとし侍れば、先最初の五の品をわかつ其第一

一 初段 扱も、其後 一二段目 扱其後 一三段目 去程に
一 四段目 扱て其後 一五段目 去間

右五ヶの詞わから有と斗心得て音の「（四）出所ふしの語りやう其功顯るゝもの也、初段のかたり出し、一越調を可といふ事先年山本氏開版の書、けしやう水に記たり、序文じぶんに入て、五段の趣其綱要をあげ或は古語を引用ひたる文勢に、其言の位おはやうに長高

く言出す、是を真の序まのじといひ、又は古哥こかの心詞をかりて地より語り出すを序と云、又は今様の風俗の詞にて出るを、草の序といふ也、此三品は正本のふし付を可往見

三重七種の事

一 大三重 たとへば五人兄弟初段中入にたいこのこゑやつづみのねちの秋こそ」（四ウ）真の三重共云、是は初段中入より外にはなき事也、其外は行草の三重也

一 常三重 たとへば五人兄弟初段の内になを山ふかく三重かりころも是を常三重と云也

一 猛三重 たとへば自然居士四段目中に一衣をかたにひつかけて跡をしたふて是を猛三重と云也

一 愁三重 たとへば多田院三段目中に理りやと皆々お次へ三重しりぞきぬ是愁三重也

一 中愁三重 たとへば百日曾我四段中に今きし道を立かへる心の中こそ三重 是中愁也

（以下本館編輯部ニヨリ）一 道行三重 是は大方道行中入に出るふし也

一 吟三重 たとへば十二段の三段目中にすでにくはげんぞ是を吟三重と云也」（五ウ）

五節の段切

一 神祇釈教恋慕無常哀傷祝言等につけて責、詰、勇などのかは

りめあり、仮令たとへば神祇じんぎは天智天皇てんちてんわうの三人みたりの翁おきなの段切、高砂の謡のごとく双調さうてうに終るべし、(以上補寫)祝言しよげん是に同じ、音声おんせいを引すて迄める事なきやうにかたるべし釈教しやくけうは五戒魂第三の段切平調へいてうよりとりて次第しだいにあげ、つめをかたるべし、無常むじやうは黄鐘わうしゆなど、みなそれ〱理りの上に、呂律りよりつの配当はいたう有べけれども、大やうかくこゝろへて、たゞふしの語りやうはやめて、詞ことのわかるやうにして、もたれざるをよしとするなり

七ヶのをくりの事

一常つねヲクリ たとへばせみ丸三段の中に〱金かねをなをへうらみて是をつねヲクリと云也

一小ヲクリ たとへば百日曾我道行中に何なにをへうらみて 是を小ヲクリをと云也

一ギンヲクリ たとへば甲賀三郎道行中にこんかうへづえの是をギンヲクリと云也

一色ヲクリ たとへば五人兄弟五段目中にこんきつかれてうつゝな色ヲクリくとろりへ〱とね入ける是

一ウヲクリ たとへば五戒魂道行中になみきのしづえばく〱とつゞきの是也

一アタリヲクリ たとへば甲賀三郎三段目中に手のうらかへすちそうぶり心のへうちのおかしき是也。

当流淨瑠璃小百番

一小哥ヲクリ せみ丸の道行きけばやア、こゝにあはた口甲賀三郎三段目につばね〱に火をとぼす、是は後の詞小哥にうつるによりまへよりをくる」(六)ふしにこゝろへあり

一又道行ヲクリに二色有たとへば五人兄弟の道行の中にゆかはヲクリへせんりも又せみ丸の道行の中にしはれ へ出させ

右のをくりぶしは五段にわたりてところ〱にあり、又道行の中にもある事なり

道行出端の事

一曾我五人兄弟の道行フシはとげもとは是をフシといふなり

一百日曾我の道行ハルフシ恋といふ是をハルフシと云也

一世継曾我の道行ハルさりとて是狂女出端あほうといふ、右はあやつりのしぐみにより、人形つか〱と出る時、或はくるひの時、又段初の道行に、人形出てより語出す時、此ふし有」(六ウ)

一せみ丸の道行ハルむすぶの神も是をフシハルといふ也

右の四色は平生へいぜいさだまりたるふしながら、其位かたりやう有、此外時節ときせつのはやり哥にて語出す事有

五段の中 節付之事

一 此しやう謡のごとし

一 此しやう持引

一 此しやう持はつむ

一 此しやう持はぬる

一 ウとあるはおんじやうく心

一 色とあるは詞にもあらず地にあらずつめる心也

一 フシ「一 此ふしはあるひは五人兄弟道行中にまゆのくろみのくろく」と是をフシといふ

一 ウフシ 此ウフシはあるひは五人兄弟道行中にしぎたつさはなくして是をウフシと云」(モウ)

一 キンフシ 此キンフシはあるひは百日曾我道行中にかうしたくには是をキンフシと云是少つちがひ有

一 スエテ 是はつよくをす也、あるひは五人兄弟道行中に恋とほだいと引わけて又時により上にてつよくをすること有

一 ウスエテ 是はういて色をつくる也、或は百日曾我道行の中になみだのうちに思ひつき是をウスエテといふ也

一 ノル 是はあるひは百日曾我道行の中に我になけとや薄うちわ是をノルといふ也

一 トル 是はあるひは百日曾我道中にてふもつばさを是をトルと云トル三重共云也

二 二引三引二字さがり三字さがりの事

一 二引はあるひは五人兄弟道行中に今の衆生にかはらめや是を今の衆生にかはらめやとかの字を少ふる心にかたる也二つ」(モウ)

ながらおなじやうに重て引はいやく聞ふるゆへ也三字引も右のごとし

一 二字さがり三字さがりといふ事はあるひは世継曾我道行の中にこんでいこまのもろだづなは二字さがり也もろき涙にくれけるも三字さがり也

うれひのふし付の事

一 甲の甲といふ事あり、たとへば五人兄弟四段目のうれひ大かたかんのかん也、惣じて人のなげくこゑ、女の調子は断金也といひ伝へ侍りぬ、又乙にて語るうれひは、くときといふなり、うたひのふしの思ひいれなり

助語の事」(入)

一 右七情のわかちあるべしたとへば

ハア ハア エ、エ、ア、ア、ヨ、

ヨ、イヤ イヤ ムウ ムウ ナフ ナフ

右の七種経にとける、医家にきたするとのちがひめ、少しあれ共、先驚く時のハア、かなしみくしてのハア、いかりのエ、たのしみてのエ、にくみてのエ、人のうへをうらやみ我身をくやみてのエ、男女のしやべつ、とをくよびかくるナフ、ちかきに物いふナフ、其品とは文理を、よくく熟得風味すべし」(入)

『淨瑠璃小菊丸』序跋

筑後掾段物集。大阪山本九兵衛版。序・目次標題「淨瑠璃小菊丸」の六字以外は『淨瑠璃小百番』に同じ。『淨瑠璃小百番』より後か。

小ぎく丸・みとり丸・ひでん丸此三糟の道行揃は、予が秘密のふし章の規矩を以て、是を正し集め、山本氏に板行に彫しめ音曲の海をわたる榎棹とする所に、頃日おしれぬ類船出て書の題号をとり付て正本をかすむといへども、ふし付「二〇」に至りて、天地雲泥違ひある故、是をなげきて直本といへる舟印に序を加へ猶証拠のため予が判形を相添て、高麗ばし壹町目山本九兵衛店にして是をうらしむ、只いつわらざる所をしらしめんとなり

竹本筑後掾「二ウ」

(跋)

下拙直本は高麗壹町目正本屋山本九兵衛版行せしめ世に流布いたす事なるを山本を山木と一点を偽きて世人の目を閉ぐ事誠によしなき事也此者の所意をさつし見るに版行の料目をちぎめんがために文字こまかに行多く節しやうくだけて見わけがたし是を所持せん人はひとへに没字の碑に拱くがごとしあゝおもふべし

竹本筑後掾「跋一オ」

淨瑠璃小菊丸・竹本極秘伝

『竹本極秘伝』凡例

筑後掾段物集。宝永刊。大阪 西沢九左衛門版。

竹本極秘伝

筑後掾伝受丸

淨瑠璃発端五言事

一

▲いにしゑは十二段の半数をとりにて六段とし、中比より五段となし一段のほつごはれ／＼にかはりたる詞、大かた人しりたる事ながら、小童のために書あらはし侍る、藝は浅きより深きにいたるを、はいとし侍れば、先最初五の品をわかつ

▲初段は 扱も、其後

▲二段目は さアて、其後「序一オ」

▲三段目は さるほどに

▲四段目は かくて其後

▲五段目は さるあいだ

但し三四五段共に二段のふし付なり

右五ヶの詞わかち有と斗心得音の出所ふしのかたりやう其功あらはるゝもの也、初段のかたり出し、一越調を可といふ事此おくにするすのみ、先年開板せし秘伝丸之口にくわしく記せり

二

三 序文眞草行之事

▲序文に入て淨るりの五段の趣其綱要をあげ、或は古語をひき用ひたる文勢に其言」の位の位おはやうにたけたかくいひ出す、是を眞の序といふ

▲また古歌の心詞をかりて地より語り出すを行の序と云

▲または今様の風俗の詞にて出るを、草の序といふ也

三 三重七種之事

一 大三重たとへば五人兄弟初段中入に

▲たいこのこゑやつぐみのねちぐの・秋こヲそ

▲是を眞の三重共云、是は初段の中入より外にはなきこと也、其外

は行草の三重なり

二 常三重たとへば五人兄弟初段の内に

▲なを山ふかく 三重へかり衣

是を常三重と云也」(二)

三 猛三重たとへば 自然居士四段目の中に

▲一衣をかたにひつけて跡をしたふて

是をきおひ三重といふなり

四 愁三重たとへば 多田院三段目の中に

▲ことはりやと皆々お次急しりぞきぬ

是をうれひ三重といふなり

五 中愁三重たとへば 百日そが四段目の中に

▲今きし道を立帰る心のうちこそ

是を中うれひ三重といふ也

六 道行三重 是は大方道行の中入に有ふしなり

七 吟三重たとへば 十二段の三段目の中に

▲すでにくわげんぞ 三重へはじまりける

是をぎん三重といふなり。

四 五節段切之事」(二)

○神祇 ○敎教 ○恋慕 ○無常 ○哀傷 ○祝言等につけて、

責・告・勇などのかはりめ有、たとへば神祇は天智天皇の三段目

三人の翁の段切、高砂のうたひのごとく双調に語べし、祝言も是

に同じ音声引して迄める事なきやうにかたるべし、祝言は、五戒

魂第三の段切、平調よりとりて次第にあげ、つめを語るべし、無

常は黄鐘など、みなそれ／＼理の上に、呂律の配当有べけれ共、

大やうかく心得、たゞふしの語りやうはやめて、詞のわかるやう

にしてもたれざるをよしとする也」(三)

五 をくりて七ヶの伝

一 常ヲクリ たとへば せみ丸三段目の中に

○ヨクリ 何をへうらみて 是をつねヨクリと云也

二 小ヨクリ たとへば 百日そが道行の中に

○小ヨクリ 何をへうらみて 是を小ヨクリと云也

三 ギンヨクリ たとへば 甲賀三郎道行の中に

○ギンヨクリ こんがうへづえの 是をギンヨクリと云也

四 色ヨクリ たとへば 五人兄弟五段目の中に

○こんきつかれてうつゝなく色オクリとろりへゝとね入ける・
是を色ヨクリと云也

五 ウヨクリ たとへば 五戒魂道行の中に

○なみきのしづえばくゝとウヨクリつゝきの・ 是をウヨクリと
いふなり

六 アタリヨクリ たとへば 甲賀三郎三段めの中に

○手のうらかへすちそうふりヨクリ心の「傳三」うちのおかしさ
是をアタリヨクリと云也

七 小歌ヨクリ たとへば せみ丸の道行に

○きけばやア、こゝにあはた口

○ 又甲賀三段目に

つばねゝに火をとばす・ 是は後の詞に

うたよりうつるゆへまへよりをくる・ ふしにこゝろへあり

▲又道行ヨクリに二色有 たとへば五人兄弟の道行の中に

竹本極秘伝

ヨクリゆかばへせんりも

○又せみ丸の道行の中に

ヨクリしはれへ出させ

右のをくりは五段にわたりにて所々に有・ 多くは道行の中に有ふし也

六

道行出端之事

一 五人兄弟の道行 フシほとけもも「四」とは 是をフシといふな
り

一 百日曾我の道行 ハルフシ恋といふ・ 是をハルフシといふなり

一 世継曾我の道行 ハルさりとても・ 是を狂女の出端といふ・ あや
つりのしぐみにより・ 人形つかゝと出る時・ 或はくるひの時か

又段初の道行に・ 人形出てより語り出す時 此ふし有

一 せみ丸の道行 フシハルむすぶの中神も 是をフシハルといふ也

▲右の四色は平生きだまりたるふしながら・ 其位かたりやう有・ 此
外時節のはやり歌にて語り出す事有「四」と

七

五段の中節付之事

▲ 此しやう謡のごとし

▲ 此しやう持引

▲ 此しやう持はづむ

▲ 此しやう持はぬる

▲ ウ とあるはおんじやううくこゝろ

▲色 と有は詞にもあらず地にもあらずつめるこゝろなり

▲フシ 此ふしもろは五人兄弟の道行の中に まゆのくつみのくろく

くくと、是をフシといふなり

▲ウフシ 此ウフシ或は五人兄弟道行の中に しぎたつさはゝさは

なくて、此たぐひをいふなり

▲キンフシ 此キンフシは或は百日曾我（五）金き道行の中にへかうし

たゝくに、是をキンフシと云、是も少づゝのちがひ有

▲スエテ 是はつよくおす也、或は五人兄弟道行の中にへ恋とぼだ

いとひ、きわけて、又時により上にてつよくおす事あり

▲ウスエテ 是はうれいて色をつくるなり、或は百日曾我道行の中

に、へなみだのうちに思ひつき、是をウスエテと云也

▲ノル 是は或は百日そが道行の中に、へ我になけとや薄うち

は、是をノルといふ

▲トル 是は或は百日そが道行の中に、へてふもつばさを 是

をトルと云 トル三重ともいふなり

八 ニッ引三ッ引之事（五）

▲ニッ引は或は五人兄弟道行の中に、へ今の衆生にかはらめや、是

を今の衆生にかはらめやと、かの字を少ふる心にかたるなり、二

ッながらおなじやうに、かさねて引はいやししく聞ふるゆへなり、

三ッ字引も左のごとし

九 二字さがり三字さがりの事

▲二字さがり三字さがりと云事はあるひは世継曾我道行の中に

へこんでいこまのもろたづな、是二字さがり也 もろき涙にくれ

けるも、是三字さがりなり

十 うれいふし付の事

▲甲（六）の甲といふ事有、うれいあり、たとへば五人兄弟四段目のうれ

いは（六）大かたかんのかん也、惣じて人のなげくこゑ、女の

調子は断金也と云伝へり、又乙にて語るうれひはくどきと云也

うたひのふしのおもひいれなり

十一 助語七情のわかち

▲ハア ▲ハア ▲エ、 ▲エ、 ▲ア、 ▲ア、 ▲ヲ、

▲ヲ、 ▲イヤ ▲イヤ ▲ムウ ▲ムウ ▲ナフ ▲ナフ

右之七種経（七）にとける、医家（八）にきたするとのちがひめ、少しあれ共先

▲おどろく時のハア ▲かなしみくしてのハア ▲いかりてのエ

、▲たのしみてのエ、▲にくみてのエ、▲人をうらやみ我身

をくやみてのエ、▲男女のしやべつとをくよびくるナフ

▲ちかきに物いふナフ

其品々は文理（九）をよくくじゆとくぐわんみすべしと云々（六）

『竹本秘伝丸』凡例

内題「竹本秘密丸」。筑後掾段物集。西沢与志編。
宝永初年刊か。大阪 九左衛門版。

竹本秘密丸

淨瑠璃口伝書

▲初段之事

凡恋

一序の内おろし迄は一番の内の式三番也。或はうたひより出地より出ふしより出る心持かはるべし。調子は大やう一越可なり。いかにもあざやかにみだれたる糸をさばくやうにかたる事也。見物の氣をしむるならひ有。段切五段共に大事なれ共。初段の段切ことに大事也。初日の初段は子細有事也。恋慕は忍びの段などて昔より一通ある事也。第一只風俗を大事に。心をつよく詞をかろく氣をしはれてかたる也。女方のせりふいやにならぬやうにかたるべし。恋なればとてやはらかにかたればもたれてうるさし。せりふは川瀬のごとくふしは淵のごとくといふならひあり

▲二段目の事

凡しゆ羅

一初段の位をかへて。めいらぬやうにかたる。かろきは位也。しゆ羅は古播磨太夫の秘藏せられし口拍子有。聞人こぶしをにぎる様に氣をたるますかたる也。緩急急緩といふ事あり。舞詰の類。

口はやくば心をしづかに持べし。口のお「こ」もきは心をかろくかたるべし

▲三段目の事

凡愁歎

一上りのこなしあやつり。三段目をまなことして。能ならば曲舞也但し淨るりの趣向により。何のこともなければ。位を付て三段目にしとかたりこなすならひ有。三段めの位とて別に有。忠臣のはかせといふ事奥にするす。愁歎は真実をわすれず。一ばんの上るりを胸にこめてかたる事也。心のもちやう甲乙の習あり。口説・物語・過去目前・感涙等のしなへに差別有

▲四段目の事

凡道行

一間を広くもたれぬやうに語べし。淨るりも大様むすびになり人の氣もつくる比なればもたれてはあし。道行はふし事の第一とする也。貴賤老若男女。長道中。一日路。舟路。山路のかはりめあり。され共是は心持ばかり也。しやみせんいうちそひやさしくかたるもの。序破急の三段。序の急。破の破。口伝まちく也。但しやみせんいうちそふといふ事。そふにあらず。拍子にはまるといふ事。逢といふを工夫あるべし

▲五段目の事

凡門答

一壹番のくゝりなればむつき物也。去ながら五段めは淨るりの趣向次第也。位は祝言。初段は潮。二段めはうらぎぬ。三段めは

もやう・そめ色うはゑぬいはく・四段目は糸わた五段めは仕たて也・問答詞はみなきやうげん也・公家武家士民・町人敵役女若衆・仏神の詫言わきて大事有・但解之字・用の地と云事あり・惣じて是にかぎらず・ひつきやう狂言の物まねなり・鳥類畜類水のながれ・風の音有情非情迄・口にて其けしきをうつす事也・しかれども牛をうしの声・ほらがいをほらい」(三)のやうに・むさとまねてふしを付る事・あてじまひとてきらふ事なり・表裏の物まね有表とはわざをまねる・裏とは心をまねる事也ゑしやくあるべし

▲はまる拍子逢拍子と云事

○たとへば忠度の道行にては

(持はまるといふ)

▲物思ふ身は今さらに

(不持逢といふ)

余准レ是

一たてぬきといふ事あり織物のごとしさればこゑのあやをなすといへり

タナノベル

▲此比なれしはかせもの思ふ身は今さらにみくにきびしく身にぞしむ愛こそこゝよ

タナノベル

一君臣の事淨るりは君三味線は臣也」(三ウ)

○君臣といふふし有たとへば

▲わせおくてなかるたや一二三

君ソフシ
▲けふりのすへを見わたせばいせのうみづらへうくと

▲素淨るりの事

一しやみせんはひきてあやつりなしを言は・誤なり実はしやみせんなしにかたるを素淨るりといふ也

▲四歩六歩至極の秘伝

一高壹尺の物を始五寸の内に語末五寸の間を三寸にかたる事あり又はじめ五寸を二寸五分にかたり末五寸の間を七寸五分にかたる事ありしやみせんの合手又あしらひともに淨るり斗にてしやみせん」(四)の間をかたる事也一挺鼓同意の秘が中の秘なり

▲地詞ふしの事

一地は水のごとし詞はながれのごとしふしはよどみのごとしといへり

▲節章秘伝書

トアルハすぐにかたる章	トアルハ入ておすしやう也
トアルハもつしやう也	トアルハふるしやうなり
トアルハさぐるしやう也	トアルハもつて少おす章
トアルハさげて持しやう也	トアルハのむしやうなり
トアルハいるしやう也	トアルハもつてはぬる章
トアルハおすしやう也	トアルハはつてはぬる也

トアルハ中におす章也

トアルハはやむるしやう也

トアルハつよくおす章也

トハうゐて語心也

口伝あらまし如此

竹本氏(自ウ)

『鸚鵡ヶ杣』序 跋

筑後豫段物集。正徳元年七月吉日、筑後豫自序。
不移山人(近松)跋。大阪山本九兵衛・山本九
右衛門版。

序

いろはにはへと尊円親王の御筆も七歳の太郎松がかけるも点画
かはる事なくいの字はいの字によりろの字にきはまれども
よしあしの階級は千重万段心こと葉のおよぶ所にあらずからにしき
晋元の王羲之趙子昂敷嶋のやまとは道風佐理行成などあまたの名
筆の「序」工に書なせる文字の形しな／＼なれど筆法は十二点に
はじまりて十二点の外を出ず韻会字彙玉篇等廿余万の鳥のあとたえ
せぬ宝なりけりと物かく人の語り給へるにかなえなる方に心得たる
人の申されしは六藝の道いづれかかはる事の有へき文武の樂は美つ
くし善つくさずのたがひめこそあらめ樂におゐては五音十二律にも
るべからず」こゝ申樂を見侍るに上手のさし扇下手のさし扇さす所
にちがひなく引所さらにかはらず鼓たいこまた然なり上手の笛とて

鸚鵡ヶ杣

笙箏篳篥のこゑもふかずひいひやりをよく／＼吹おほする斗也立
出て峯の雲はたが舞ても遊谷四海波静にてはたがうたふても高砂平
家のふしにうたふたる名人もなけれどもよしあしの雲泥なるはいか
にぞや万の「三」藝かくのこしきたまりたる事を能すべし但その
中の曲節は時にしたがひ折にふれて臨機応変問々有べきにやし
かはあれど利休・紹・宗・和などのかはりし物数寄目を驚すとい
へども湯のうへへ茶を入れて香煎ふるやうなる無理なる物数寄もな
し名におふ歌人のさま／＼の狂歌の雑体はあれ共五七五七の外はよ
み給はずもろ／＼の藝能師伝をうけて「三」定りたる事をよく／＼
切磋琢磨して時に応じて略変の用捨こそ達人のわざとも名人の藝共
いふなれと語り給ひしを僕末座に有てつら／＼うけ給るに我淨るり
の道におもひ合ていさ／＼かも違はず淨瑠璃はじまりて百十余年
滝野沢角兩校平家にくはしく琵琶の妙手たりしより淨瑠璃物語と
いふ双紙をつづりなをして葉師の十二神をかたとり十二段といふふ
しを「三」語り出せりその時は三味線にあはするといふ事もなく
扇をひらき左にもち右の手の爪さきにて骨と地紙とを搔ならして色
々の拍子をととりたる事也その十二段の目録さへ今はしりたる淨るり
語りもなし此外に都めくりといふもの一段有是は検校の門弟京東の
洞院目貫やの長三郎といひし人の作なりかけまくも賢き慶長の帝是
を興せさせ給ひて人形にかけさせ観覽度々」三有しより淨瑠璃

太夫受領に拜し世に行れて安口の判官弓継鎧がへ戸井田五輪くだき是を五部の本ふしと伝へ侍る岷江の濫觴絶ずはびこりて音曲の海波しづかなる時つ風民やすき御代のたのしみ淨瑠璃といふ一ふしのさだまりぬるこそ浅からぬ何の道も古へをあふぎて今を恋ざらめやは此音曲も格に入て格をはなれ格をはなれて格に入といふ事」(四)第一の習なるべし古播磨太夫は淨りの中へ謡をいゝさへまんざらの謡にきこゆるはあしと申されし謡にても歌にても淨るりに打そひて淨瑠璃の格にはづれぬ様にうたへと申されし肝要の詞也けり僕が門弟には淨瑠璃の文句の中ならば謡も歌もうたふとはおもふべからず語るといふべしとこそをしへ侍れいはんや時々のはやり歌木やり音頭のたぐひ面かげはさも」(四)ありなん淨瑠璃の正体に眼をはづすべからず世のはやり歌とて半年はやるはまれ成事にて上方のはやりこと遠国にしらずいなかのはやり物都路にしらず上京の事下京に聞えず天満の噂難波にしらぬ事のみおほし異国には大きな御殿ひとつの内にさへ一日の間気候ひとしからずといへりはやり事さのみ好ずともあらまほし世間のはやり事聞出し」(五)淨るりに入んより手前の淨瑠璃世間にはやる様に稽古有たきものなり世継曾我の道行に馬かたいやよとおどり歌入し事相應せず一番の碓今聞に汗をながすと三十年前を後悔ある作者の心藝道の執心さも有べきなりげにも文言葉段のしなによりていかなる名人もかたり

得がたき事有べし堅からんとすれば太平記のごとく艶ならんとすれば」(五)源氏物語のごとく端手ならんとすれば当世好色双紙のかる口に似て各淨るりにあらず詩人の平仄を分ち韻字を押すも律呂にかけうたはん為とかや此國のうたひ物我駒貫川伊せの海なとの優なるさわらび吉々利々老鼠などのおかしげなるも呂律にたがはぬこそ有がたけれそのごとく文句にもはこびはかせおおよそ等程拍子有事なればそれに心を付て文字うつり音声開」(六)合甲乙の位を練磨すべき事也申も憚り有共逍遙院入道内府公は御日待の夜尺八鼓三味線などのあそびの中にいで我も一藝せんとて箏木しなきための巻を素説あそばされしにあやしの下部まで聞人感に堪て外の歌三味線もけをされしとかや源氏のよみ曲堂上の御伝授には清濁文字うつりはもちろん御ン声になまりをかけさせ給ふ所ふしを付させ給ふ」(六)所も有とかや伝へうけ給る是らをこそ音曲の龟鑑とも申べかめれそれ迄はおそれ有ども一藝の本意をしらんとはげむべしましてつたなき辻藝門音曲を大事有げに語りませて淨瑠璃本ぶしの立所を取うしなふ下劣の甚しき本心を外にうばういかなる狂人ぞやと宇治加賀掾の批判尤なるべし若聞人外のまぜ事をはむる時は扱は我淨るりは是に」(七)おとりたるとかへり見ていよくたしなむべき事也名匠の調合ある益氣湯も野巫医者合する敗毒散も薬味はかはらねとも大に人をそこひ又大に人をたすく淨瑠璃にか

はりたるふし古今なき事也 只趣向年代せりふ風景時宜にそむかず
無理ならぬ様に地色ふし詞迄心をかへて精をふかく語りなす
事かの病根病因によりて配剂加減有がことし外の事」(セウ) まじ
ゆるは一味二味の加葉のことく本方のための加葉にて加葉のため
の本方にあらずとしるべしかくあればとて本式にわきめもふらず
つくりつけたるごとくなるは仏藝とて嫌ふ事也 其内の意味は
声とふしとの和にありて言語道断天然の所なるべし 万巻の書を暗
じても 面授口伝なくしては万の道成がたしとかや峯の薬師の淨
瑠璃の本方相伝のうへに「えさ 年をかさねて口伝のうへに 工夫
をつみて加減の修行あらまはしく四拾余年 来寤寐にも是をわすれず
といへども 今に淵底をつくさず是ぞ語り得たりとおもふ事のなき
は我身なからいかなる事ぞやと申侍りし詞の中より正本屋山本治重
其座に有て鸚鵡が杣の板行なりていまだ序とする物なし 幸に只
今の教訓ししてよと硯をならして口うつしのやがて「えさ 紙上に
うつりけるはむべも 鸚鵡の轉りなりけらし 今此もてあそび隆盛
にして雲の上には大宮人の桜かざし給ふ比 諸候は御在国の御つれ
／＼淨瑠璃をうつさしめ給ひて 僕か墨譜の仰をかうふるもおほか
り板行の書なりては富家の深聞にもあそばれ 遠国波瀾の樵歌に
もまじりて道のひろく布わたれる事のあら葉只されども重板類板
まら／＼にて或」(九さ) は七行に書かへ予にことわりもなく奥書

鸚鵡ヶ杣

名乗をにせて直本正本といつはり世を欺きしかも文字をあらけ
紙数をかさねて価を卑し 藝の道を輕蔑にし直伝をうち消さん
とする意路のわるきたぐひ伝々写々として節頌墨譜にいたり 毫末
のあやまり大なる相違となる事我猶これをやめりたるとへば唐人參
の見ばよきよりも朝」(九さ) 鮮の麗人參の功能はるかにまさるかこ
としそれがゆへにはやくよりせしがことく予が名の下に青赤の二
印をくはへて直伝してあらはすは 山本九右衛門一家にかざりて外
にはなしといふ事を爰に示して是を序とするものしか也

正徳元辛卯年

初秋吉日

筑後掾藤原博教

(壺印) (角印)

(竹本)

教博

筑後掾門弟

可之	賴母
隆流	喜世太夫
枝雀	宮内
泉諷	左内
富堅	内匠
丸武	喜内
友章	茂治
満声	新太夫」(十ウ)
歌昔	茂太夫
万周	若太夫

(以下、上段ノ終リニ下段初メヲ續ケテ讀ム)

源太夫 半太夫

有跡 治平

佐平次 伊太夫

八兵衛 茂兵衛

右内 平次

金太夫 長太夫

吉太夫 藤太夫

文太夫」(十一才) 吟太夫

伊閑 伊兵衛」(十二才)

采女 弥兵衛

津太夫 富佐太夫

右太夫 半太夫

利太夫 佐内

傳右衛門 武太夫

小太夫 治右衛門

長四郎 勘兵衛

佐太夫 新助

宣太夫」(十二才)

羽太夫 主馬 市太夫」(十二才)

跋

一こゑ二ふし伽陵頻の玉子のふはく奇妙の声の葉と云云上は碧落下黄泉を窮るに得る事なし文質彩々とは三味線のこゑ淨瑠璃は孔子の時に始り論語の語の字をかたと訓すと自己の工夫に年月を費し師伝を守らさればサアと云時事をかき初恥を書初」(發一才)天筆和合末一年中の初段はしまり初も其後此一句微妙の七文字五十余帖のいつれの御し時伊勢の御の昔男古の伏儀氏の天下に王たるにも肩をならふる発語の詞此類いかい事詞は古きをもつてさきとす心は新しきをもつて詠ずべしとその心はいかに心を古風にそめよとこそ道正坊の説法いひ勝の世の中心口」(二才)もつていはぬが損嚙あてたる犬の蚤も痒ところへ手がとどかずア、しん氣あたご山には太郎坊鞍馬山には僧正坊すいけん山には鵬を見て天狗ともおどろくべし相応くゝの振舞京の祇園の文字が献立には鴈も鯛もふるめかしくあみ笠嶋には知ぬ鯛龍と成て天上す一座一興によつてはむる共おもひあがりて稽古油断せざれとこそ凡夫劫を経て仏と成下手修行」(三才)して名人となる離婁が明公輪子が巧も規矩をもつてせざればなす事能ず九妓百家の道々稽古の労を歴ずして至極をしらば古人なんぞ積功累徳を称美

し給はんや腐草化して螢と成てこそ玉の光は顯るめれいまだなり
もせぬ草葉のうちより光を螢に争んとする是ぞしやら草葉の露を筆
にそゝいで跋と云事こんな物ならんかし

散人不移子平安草」(二ウ)

『翁 竹(九曲卷)』 序 跋

加賀豫追悼段物集。正徳二年春、門弟榮竹序。
山本九兵衛跋。山本九兵衛版。

序

紀の民宇治の住竹翁好澄は三十余りの春秋を花洛に遊びて行年七
十七歳にして宝永年中卯の初春廿一日卒す号自澄院本淨道融居士此
人自然に音声微妙の術そなはり受領の口宣成し下されふしすなほ
にたくましき大竹集を編れしより其すゑ葉世に幅り諸人」(二オ)
是を口真似せり予年比心をしたひしも今はむかしに成行なめりあと
に残されしすさひを見るにもをのつから涙落て我にひとしくしたふ
人に見せまほしく梓に物し侍る翁竹

洛 巽

正徳辰の春

榮竹」(二ウ)

竹翁いひのこされし二十一首の狂哥

翁 竹

淨るりの地ふしはほとゝ拍子にて
持合もちりうつりせんなり
淨るりの道しるへせし紫竹杖

つきえぬゆへに迷ふふし／＼

我流を語り得たりとおもふとも

ならしはうつりかなもちりほと」(二オ)

ならひとは位はかせにほとうつり

もちり持合かな開口

一文字に八つならひある音曲の

道くらかりをはしるおかしき

藝のみちふかさあさゝもしらぬ身か

すひたていふてはまるおかしき

藝は柿ならひは皮とさねとしん

とり捨されはむまみなきへた」(二ウ)

三味線の糸よりほそき声をして

すかゝき道に引おとさるゝ

ふししやうはなまらぬやうにたけをいの

おなしふしをは遠のけてよし

言葉こそやすきやうにて大事なれ

とふにこたふるほとをしるへし
ならひなく声にて語る淨るりは

しふさあまのしれぬしんさい」(三六)

音曲はたゞ大竹のことくにて

すくに清くてふしすくなかれ

声拍子よき淨るりと名はうれと

根葉あらねはむさしきたなし

人のうへ評判しやるといふ弟子の

淨るりきけは始しう病るり

声拍子よくても品をならはぬは

乞食の手に持しはくわん」(三七)

淨るりのいきつきことに拍子うつ

辻うち下地いつそ笠きや

みかきおく玉の光りは皆きへて

八つのをしへはくらま石の火

我死なはしらぬ事をもしりかほに

ともなふてしのなかまわれかち

我しなは淨るり色も消ぬへし

われかちんにてよこす泥なり」(三八)

淨るりの光りを四方にてらす身も

消なんのちは右に名はかり

淨るりの声もたへなるみのりにて

鳥辺の山に残す名はかり

又竹翁つね申されし音曲の

古哥つゐてのまゝに追加となしぬ

語らんにまつ祝言をもつはらに

さて其後はれんはあいしやう」(四〇)

始なるところへ行てかたりなは

主人の名のり名字とふへし

淨るりは調子をひきく吟しつつ

みしかき事をまつ語るへし

稽古をははれにするそと思ひなし

はれをはつねのころなるへし

はれのやくまへのけいこを能なして

其期のころゆうくともて」(四一)

声出す小音なりと音きよくは

ならひて語る人を床しき

音曲はかるき心そよかるへし

おもきもわるくしたるきもうし

寄合て語る時には其中に

初心の人は耳をあくへし

音曲の声のくすりは何よりも

つねの声をはつかふへきなり」(五ウ)

語り出すころは何とおもふらん

主にもものいふころ成へし

語り出すこゑをは何と思ふらん

われを忘れてうくひすの声

何事も工夫にまさることあらし

ならひのほかにくふう成けり」(六ウ)

竹翁自筆の真の序 大三重 翁淨るり

老まつ是等いまた板にみへさるゆへ直のふし章を以てひたりにし

るすものならし

真の序開口

加賀掾

息をはいに引同つき二の息しつかに引かたり出す声はそからす

ふとく少も色もなくゆりもなく心意外へちらすことなかなへて其

たしなみ専たるへし」(六ウ)

(翁・老松及び九曲卷省略)

一ふしを筆に残して翁草

竹翁

散とふ花の根はしからすな

何事も皆あたし野々世の中に

同

きえても残す竹の一ふし

と書残されしをみるに付ても其心さしの猶あはれに袂を
うるほしわすれ草わすれぬものからつたなき思ひをつら

せ侍る」(三十九ウ)

追福

なき人の形見やあとに翁草

花とそ匂ふわしの山かけ

栄竹

たえすしも猶世に飄ふ一ふしは

竹のおきなすへ葉成けり

同

いとしけき其ふしことにくれ竹の

ねをこそなかねしたふころは

嘉太夫

はいかいほく」(四十ウ)

浅黄桜見る気は今そ墓参

嘉太夫

石塔に名のみ残すや仏の座

若狭

翁 竹

三光の鳥や不可思議ほと拍子

甚太夫

加茂川や跋提河そとなけく弟子

圭太夫

竹になくほう法華経や手向草

玉山

世やあらた終にはもろき玉椿

遊時

春やむかし涙の竹のふしはかせ

愛致

松風や文字にむかへは袖霞

栄竹」四十ウ

跋

筆とれはものかゝれ楽器をとれば音をたてんと思ふ誠やうたふも舞も法の声余念なきこそ仏ならめ治れる代にすくなる竹の翁の門葉榮竹は集をつりて追善にせらるゝ事殊勝に感心し侍る然を予ニ此跋をせよとせちにこひ給へられき本よりつたなきことわさ」(四十ウ)人のあさけりをも帰りみすよしや靈位の手向にもなりねかしと円齋詞の葉をつくものならし。

老らくの形見に残す一ふしを

たえすもしたふ世々の諸人

山本九兵衛刊」(四十一ウ)

『鶯歌か蘭』序

筑後豫段物集。正徳二年九月吉日、筑後豫自序。
大阪山本九兵衛・山本九右衛門版。

鶯歌か蘭

序

七月七日の炎天にあをのきふして腹中の書を虫ぼしするといひし物しりもその身ひとつの樂にて張安世が三箇の書をそらに覚えて書記し帝道を助け記憶には及ず仏の御法聖の教家をとゝのへ身をおさむるめで度道は申もいまめかしさらぬ滑稽伎哥の詞迄筆にそめ桜に彫てこそ忽忘のそなへ永き世のもてあそびならめをのれ若かりし時は淨るりの数もすく」(序一)さなく品もまち／＼ならずをろ／＼暗にて語り侍りしが年々に数もそひ行まゝに詞も節も似たることにまざれて半より余のことにかはり或はかたりさしてうちをき或は舌だみ口たどりなんどして一座の興をさますこと間々多し我が門弟はなをさら也淨るりにあそぶ人々月の舟もみちの庭一ふし望まれたらんに覚えずとてやみなんも物すぐければ用意おかしくふところに書をたくはへたらましかば望みし人もともにほあるわざなるべしとて例の山本氏につげて遠き近き興有ふし所をあつめ」(二)此趣をはし書にしるし侍る淨るりの教訓は往々にのべ侍ればこゝにもらしつ

此ころ古宇治加賀掾の遺書とて淨るり翁竹と云書を見侍るにげにも音曲の掟といひつべし。伝授は修行の内にあり伝授に縛せられて修行の功をさまたげぬれば開合おどろくしくふしはかせすなをならずしてこゑをそこなふかの下里巴人の曲には國中属して和する者数千、人陽阿薤露に至つて数百、人陽春白」三。雪の曲をなす時國中属して和する者数十人とかやうけ給はればあまりに山のおくを尋過て高上ならぬ様に稽古あるべし。鸚鵡が柳のひろき良木の種をひろひせば懐中本にうつし侍れば是を鸚哥が園と題しておなじ口まねすると云爾。

正徳二年

藤原博教

壬辰 九月吉日

国性爺大明丸序

筑後掾段物集。享保元年十二月、近松序。

むかし栄花の公の大井川の遺通には管絃の舟和哥の船文字の舟をわから其藝にたへたる人をあらみのせられし今此新艘に何をか積し曰竹本か一流管絃あり和哥有詩文有農業あり商売有武事のいさめるれんぼの相やはらける人事のさかしおろか成仏神の権化花鳥の□音

鸚歌力蘭・国性爺大明丸・竹本筑後掾門弟教訓並連盟状

風声水音凡□の□(以下一行磨滅)

「(一〇)

のとり榎ふしのおも榎を□に写して津々浦々にまはしはてしなき国々深山の奥の里々迄至らしめんとてそ紫檀の檀象牙の檠三筋の纒にかけて舟乗よしの大吉日順風の時を得たりのせてやれ大明丸

享保元年申の冬

春ちかき日

近松序之「二」

『竹本筑後掾門弟教訓並連盟状』

宝永七年正月。卷子仕立伝書。

凡音曲道上平去入四音四機開合假名清濁をもととする事いふに及す就中淨瑠璃とて薬師如来の宝号を申事淨瑠璃御前の事よりおこりたるのみにあらず平判官康頼入道平家物語を作りて生仏におしゑしふし付は台家の称名より出たり故に称名に二重三重有平家に又二重三重有滝野沢住の語り初し十二段の古きふしも三重斗そ今世には残りける扱こそ淨瑠璃と名付る事讃仏称名之心もこもるよし伝え承り候しかれはおろそかに語るは薬師如来の冥感もおそれ有にあらすや予弱冠のむかし古播磨太夫の門下にしたかひ口授をうけ秘伝を

得餘力有時は他人の音曲をもひそかにうかゝひ四十年來心をくたきて今一流を極る事聊予が私にあらず鉢用の位長短の墨譜其外程拍子地はこび寄字戻り響音移り持合中ル さはる等之違数をしらす皆々口伝あらすしては至りかたき事なり古の本には勺切斗にて頌をさす事なし皆口伝にてならひたる事なり近年詞地色地ウフシ等の頌を付る故それ任せに語りちらし或は予が正本の又写しにうつし段々伝写之誤多キをも吟味なく我社習ゑたり顔に語る人は始の殻をそれと思ひて中の身を捨てと云山家者之たとへに似たり或は聞人之耳に本心をうばゝれ声を作り又はおのれか声自慢に色を付時花歌などにかゝはりて淨瑠璃の正鉢をうしなふ事鵜が鶯のまねして鵜にもあらず鶯にもあらぬかことし諸藝共に口伝面授なくして奥底に至る事いまた例を聞す予か門に遊ぶ人々無心得て稽古修行あらは秘伝を残さず相伝して一流を永々にとゝむるニおゐては老後之思ひ出何事かこれにしかんや口伝は師匠にあり稽古は花鳥風月に有常々神祇釈教悉無常人倫生類山類水辺簞物述懷哀傷祝言等に心をよせおこたりなく稽古有へく候なり穴かしこ

藤原博教

右御教訓承知仕候口伝を受師恩を蒙り候上は何用之儀にても相背申間鋪候然上は無懈怠修行可仕候淨瑠璃心かけなき仁に猥に伝授

仕間鋪候尤淨瑠璃一通リ之儀におゐては師命之儀御座候へはそりやぐニ仕間敷候若不屈成義御座候は、如何様共可被遊候其節一言之申分無之候御事

一他流他人之淨瑠璃をそしり自身を高慢し私にふしを交え我一流と立申間鋪候御事

一遠所他国は不及申於当地以門弟にて無之者門弟と申掠私ニ弟子を取我儘仕候者有之候は、吟味致ともなひ申間鋪候并相弟子中申合右条々相背候は、平に異見仕急度相勤可申候為其銘々判形仍如件

宝永七寅年正月 日

(以下、上段ノ終リニ下段ノ初メヲ續ケテ讀ム)

喜 内	藤 大 夫
喜 母	吟 大 夫
喜世大夫	市左衛門
宮 内	拍 半 兵 衛
茂 大 夫	治 兵 衛
新 大 夫	八 兵 衛
金 大 夫	長 四 郎
伊 大 夫	半 兵 衛
有 跡	右 京

三右衛門
武兵衛
半右衛門
伊兵衛
伊 関
儀
小大夫
吉大夫
傳右衛門
利太夫
右 内
左平治
十ノ右衛門
左 内
文太夫
喜兵衛
九兵衛
夫 助
半右衛門

三右衛門
薩次兵衛
采 女
長太夫
佐 内
弥兵衛
佐太夫
半太夫
佐 内
伊大夫
武太夫
茂兵衛
万 周
九兵衛
主 馬
勘兵衛
新 助
藤 利 中
嶋 弥右衛門

布喜 平
ナシ 松太夫
九右衛門
彦太夫
難 波
治右衛門
清太夫
采 女
藤兵衛
勘太夫
儀 弥兵衛
左 近
長兵衛

下松 喜兵衛
次兵衛
半三良
大和 忠兵衛
主 膳
改
いろは
織 部
式太夫
近江 徳兵衛
安 母
加 跡
鹿嶋 弥兵衛

竹本筑後掾殿
代竹田出雲殿
同中村喜兵衛殿

筑後存生より被定置候正五九月廿日会之儀御門弟衆之内近年心々
にて成就いたし難候左にては此会退転ニ及道喜存立之本意も難立且

は一流之末ニ茂成候事平ニ残念至極之義に候故当正月改テ致興行有増申談候御方も御座候町中御最負之道喜にて今後は時節を見合々大会を催其時之寄銀を廻シ歩合を以後々は無料不入永々無斷絶壹年三ヶ度之会相談いたし候は道喜念願も叶御門弟中之追善ニも成可申と存立候大会相勤申迄之間御出產御不参共ニ会料御出シ可被成候哉御同心之御方は印之為門弟帳相改申候間御判形可被成候 以上

竹田出雲

享保六 丑年五月改

(以下、各上段ノ終リニ各下段ノ初メヲ續ケテ讀ム)

喜内	文太夫
頼母	四郎太夫
政太夫	布喜平
大和太夫	左近
国太夫	泉喜兵衛
新太夫	播長
茂太夫	門龍
金太夫	平次兵衛
吉太夫	下松喜兵衛
利太夫	林太夫
左平次	喜代太夫

『淨瑠璃千疊敷添柱』序

筑後豫段物集。享保六年七月、雪娘序。大阪山本九兵衛・山本九右門版。

序

千石船は下積に足を入れて風波を涉り千本念仏に狂言をまじへて眠を醒す是皆元を精せん為の助力にあらずや故に今女夫池の水を汲て名高き古木のふし有所を洗ひ撰添柱として千疊敷の長庇の久しき世々のもてあそびともなれかしと願ふ事を爰に題するのみ

雪娘誌

享保六初秋日

『諸葛孔明鼎軍談絵尽』序

享保九年七月上場「諸葛孔明鼎軍談」絵番付。近松七十二歳(享保九年)序。

竹田出雲少豫千前。予が淨瑠璃作文を深信じ。心を付て工夫を凝し。品々はなやかにめづらかなる趣向を編。予に添削口伝を受。幅

龍の時を待こと十年余。今度。諸葛孔明鼎軍談。出雲掾一人の心服より出。一字一点予が添削琢磨の筆を加す。善哉。迫譜。わたりもぢり。およぎ等。文字の活亡。悉予が秘する所になかひ。瓶に瓶に心水を移がごとし。故。節。にかけて口にあまらず。たらぬことなく。操の小間あかず。国姓爺に肩をならぶとの評判。又樂しみにあらずや。粵に至て。淨瑠璃作者。竹田出雲と題せんに誰か非なりと云ん。木に竹は繼れずといへども。近松が流義は。竹田を根とし。松竹の千年万世も。常盤かきはに此道の榮行末を祝。序を述るものしかなり

平安堂近松七十二歳書

『淨瑠璃加賀羽二重』序

加賀掾段物集。西沢与志序及び編。大阪西沢九左衛門版。

淨瑠璃加賀羽二重

序

加賀掾淨るりは謡狂言の音勢をちゝとし草紙の文勢を母とし修行する事四十余年四音仮名開口清濁を宗としそゝらず緩まず節拍子にかかはらず只位はかせ程うつりもちりはこび持合引廻し色う

淨瑠璃千疊敷添柱・諸葛孔明鼎軍談絵尽・淨瑠璃加賀羽二重・富松時計草

きあたり舂用長短等の故実をふまへ詞地色地ふしの品をみがき流義を究む拍子はこれ身より出る悪心程は外よる」序一すゝむる善心善をもつてみがき伝をもつてすゝがすはいかで淨瑠璃の光耀音曲の眞理にかなはんかゝる差別も弁す。己が声拍子にまかせ或は他の悪拍子に位をうばゝれみだりに語りちらすは偏に本心をわするゝ狂人共いひつべし又習はずして草紙のふし付を見或は聞語などするを間似合淨るりと云成べし諸藝共にか程利口はつめいの人とも口伝を受ずして道にかなひ劫至る事あるべき藝の奥底かぎり」三としられずかならずはむるにのらず卑下をなし雲井の月貴賤の老若男女海中の龍魚鳥畜風雨滝川の音までに心をよせ猶憚怠なく修行有べきものなり

一好澄數百段かたられし淨るりいづれか易しと思ふはあらず中にもむつかしき段八曲あり 一小原御幸 二身延 三菅承相 四泰風 五明石巻 六花子 七草刈 八葵上 是なり

西沢与志集「二」

『富松時計草』序

富松薩摩段物集。享保年間刊。京都山本九兵衛刊。

序

言を初として万物賢教愚なる程自然とまき知らせて珍しきはもと
むるになしとおもへと又あたらしき花の漢人の貢草の名も時を計る
とは題号に植て言葉のかつら長くも四季に此道の蔓れかしと師恩の
海に棹さす船の詠なれや」(序一す)

『音曲縫小袖』序

富松薩摩段物集。享保年間刊。京都山本九兵衛版。

序

世に一聞二節とて音声を第一にせしは音曲の道に至らざる者の仇
言也声は其人の天性にして大音あり小音ありたとへば叶ざる声
にしてもよく学び得たる人の語り出せる一節は聴人自然と耳を傾け
感情を備せり今集る所の此の一卷は声に濁りなき好澄の流れを伝へ
今世に専時花学ぶる富松の秘密の曲節を撰み集て薩摩模様音曲縫
小袖と題して梓にちりばめぬ」(序一す)

『音曲大和謨』序

加賀掾弟子、豊松派段物集。京都山本九兵衛版。

序

当流と持なす一ふしとは当時流布豊松の一流先師好澄の正曲をう
け伝へて新に和らげし名曲数多の中に亦景事道行の妙音をあつめ
て三十番をちりばめ懐中の至宝とすこれを興する人心を慰め和らげ
また聞人の心耳をやわらぐるは誠に大和こと葉か」(序一す)

『陸奥和拾綴』序

陸奥茂太夫段物集。元文二年七月茂太夫自序。
元文二年八月吉日刊。京都山本九兵衛・大阪山本
九右衛門版。

序

鳥を以ては春に鳴り蟲を以ては秋に鳴る其善鳴者を折んでこれを
仮て鳴とるへり故に音曲の三絃におけるも亦然り先師竹本筑後掾の
音曲に鳴事や佳音妙曲梁塵を飛して往日の宇治井上に勝れる事は
るかに遠し予若歸より此道为好」(序一す) 竹本氏が流儀を慕ふて日
々に彼音曲の床下に至り密にその曲節を窺ひ聞て心をくだき思ひ
を尽すこと多年にして漸く彼妙曲の意味を覚ることを得てつゐに此
道を以て業とする事となりぬ此におひて猶此道の普く世に行はれて
栄を今に陸奥のそとの浜辺のすへまでも語り伝へて世に茂らんと
と」(二ウ) を祝して自ら太夫の号とせり誠に此道に深く心を尽しぬ

る至誠の志通じけるにや先師筑後掾伝へ聞て使を予に送りて早く
門下に入べしと招く嗚呼かの曲節を学んでその下流を汲ながらい
まだ相逢ざることを恨みし所に時至れりと嬉しくて急ぎ彼門に入
て直に妙曲の口授秘密をつたへて「三す猶その奥旨を極ることゝなり
ぬ誠に此妙曲の流義当世の機にかなへるものか先師既に没して後も
日々に盛り月々に広まりてつまぎこる深山の奥の賤男もしほやく
浦の苫屋の蟹子まであづれか道行の一節を口ずさまぬ処もなく今秋
津州に盛んなり予諷に此集を撰する事」三すいまた必しも傍人の毀
りなきにしもあらず然ども門人稽古のために便せんと乞ふ事頻りな
れば止ことを得ずして新に曲節の秘密を加へて巻すでに成りぬ古詩
にいわく鏡は金殿の燭を分ち山は月楼の鐘に答ふと嗟々館衾の無心
なるすら猶よく鐘の響を真似るにあらずや此門に「三す 遊ん人此
心をもつて師の妙音に随はば音曲の奥庭に至ることまたなんぞかた
からんやこゝにおめて此巻を陸奥柚の館衾と名づくることゝなり
ぬ

元文二丁巳年 初秋吉日

陸奥茂太夫藤原淨慈

(蓋印) 印

「三」

音曲縫小袖・音曲大和諫・陸奥柚館衾

淨瑠璃伝授秘事
夫音曲の道平上去入四音四機仮名の清濁を元として開合甲乙の位を
練磨すべきことなり舛用の位長短の墨譜其外程拍子地はこび寄
字戻り響移り持合あたるさわる等の違ひ数をしらず先五段の語り
やう初段扱も其後二段目扱其後三段目去程に四段目角て其後五段目
去間右五ヶ条の分ち有とはかり心得て音の出所ふしの語りやうに其
功あらはるゝもの「四す なり語りやうのこゝろへ略しるすこと左
のごとし

初段

一越調をよしといふ序文に入て五段迄の趣其要意をあげ或は古語を
引き用ひたる文勢に其詞の位ひ大用にたけ長く云出す是を真の序と
いふ又は古歌の心詞をかりて地より語り出すを行の序と云又は今様
の風俗の詞にて出るを草の序といふなり

二段目

凡しゆら手づよく文句のすわりよく心を軽く「四す 語るべしたとへ
は愁ひにても十分にはもたれずその心得有べし亦是景ごととわづら
とにても重からず軽からずなにごとなくさら／＼と語る事なり

三段目

淨瑠璃のこなし此段を眼として能なれば曲舞なり但し淨るりのしゆ
かうによりなにごとともなけれども位を付て三段目にして語りこなす

心有愁歎は真実を忘れず一ばんの淨瑠璃をむねにこめて語ることなり心の持やう甲乙の秘事有りくどき物語過去目前感涙等の品々に差別有り」(五)

四段目

凡道行間を広くもたれぬやうに語るべし淨瑠璃も大やうに語るべし人の氣も尽ころなればもたれては悪し道行は節事の第一とするなり貴賤老若男女長道中一日路舟路山路のかはりめありされども是は心持ばかりなり三味線にうちそひ艶しく語るものなり然れども三味線に合過るは賤し又は合ぬも程拍子まばらにてあしその心得よく有べし序破急の三つ序の急破」(六)の破といふこと工夫有へし

五段目

凡問答始終のくゝりなれば文句あざやかに善惡を分ち口拍子はやく間どらぬやうに語るものなり或はふしごとなれば調子も各別に如何にも花やかに語り納るものなり

○ハアハア ○エ、エ、 ○ア、ア、 ○ヲ、ヲ、

○イヤイヤ ○ムウムウ ○ナフナフ、

右の七品にかぎらず文句のしなによりそれの違ひめすし有とも先おどろく時のハアか」(六)なしみでのハア怒りてのエ、楽みてのエ、人の上をうらみ我身を悔てのエ、男女の差別遠く呼かくるナウ、近きものいふナウ其品々は文理をよく熱誠斷味すべし

古筑後太夫は淨るりの文句の中ならば謡も歌もうたふとは思ふべからず語るといふべし木やり音頭のたくひも面影はさも有なん只淨るりの正躰に眼をはずすべからずこそ申されしを己が少し声有にまかせて自漫らしく色を付て時花歌の節になつみ詞の思ひ入たる」(六)としてよろつのことを似せすこして淨瑠璃の正躰を失ふことは如何なることぞや先師筑後の本意に背きて予も亦取らざる所出唐土の鸚鵡といへる鳥は己が口のまはるまゝに明暮諸鳥の真似をして人の言語迄よく真似けるは誠に鳥の中の物真似しとやいわたるによりて是ぞ鸚鵡の轉りとして定りし轉りなきがごとし予か門に遊ん人は只淨るりの正躰を失はずしてあふむの鳥の己が轉りを忘るゝことくらぬやうのこゝろがけ肝要なり愆而」(七)七七神祇釈教慈無常述懷哀傷祝言等に心をよせそれゝに語りやうの心持有べし此心得ておこたりなく稽古あらば淨るりの道盛んにして流儀を永々にとどむるにおひては彼岷江の濫觴一流たへずはびこりて音曲の海波しづかなる御代すむ老後の思出何事か是にしかむや穴かし

陸奥茂太夫書」(七)

陸奥茂太夫門弟

安治川九兵衛事

佐 太夫

(以下、各上段ノ終リニ各下段ノ初メヲ權ケテ讀ム)

葉屋清兵衛	小 太夫	阿波屋徳兵衛	武 太夫	同 權太郎	久米太夫	同明石治右衛門	織 太夫
小路武兵衛	半 太夫	河内屋儀兵衛	新 太夫	同 庄兵衛	嶋 太夫	豊前中津勘四郎	勘 太夫
八幡屋清兵衛	佐 内	舩屋太助	國 太夫	和州廣瀬彦七	源 太夫	筑前茂右衛門	梅 太夫 ^(十三才)
扇屋五兵衛	数 馬	但馬屋武助	道 太夫	同南部勘右衛門	國太夫 ^(十二才)	備後福山平右衛門	綱太夫
虎屋善七	宮 内	本屋藤右衛門	土佐太夫 ^(十二才)	勢州川崎善六	小野太夫	同尾道 又五郎	家 太夫
橘屋利左衛門	右 京 ^(十才)	綿屋九左衛門	越後太夫 ^(十二才)	同山田弥市郎	磯 太夫	同所 貞八	秀 太夫
袋屋理兵衛	治 太夫	折敷屋宇右衛門	卯 太夫	同津 市左衛門	一 呼	同所 弥七	伊豫太夫
塗師屋七兵衛	喜代太夫	合羽屋五郎右衛門	彦太夫	同所 彦四郎	豊 太夫	天満 弥七	庄兵衛
淡路屋源兵衛	吟 太夫	河内屋佐兵衛	佐和太夫	同所 仁兵衛	扇 太夫	伊丹 彌	市兵衛
吹田屋利兵衛	庄 太夫	萬屋武兵衛	加賀太夫	同所次郎右衛門	初 太夫	鑰 彌	喜平次
大和屋太右衛門	信濃太夫	新地十郎兵衛	佐代太夫	同所 甲	幸 太夫	梶木 彌	清兵衛
明石屋六兵衛	式 太夫	本屋清七	庄九郎	武州 佐太郎	佐渡太夫	井筒 彌	藤兵衛 ^(十三才)
合羽屋伊兵衛	伊 太夫	京若狭	春 太夫 ^(十二才)	同 茂兵衛	信太夫 ^(十二才)	堺 彌	勘兵衛
堺屋利右衛門	淺 太夫	同 伊兵衛	采女太夫 ^(十二才)	備中宮内文次郎	菅 太夫	淡路 彌	佐兵衛
玉屋理兵衛	金 太夫 ^(十二才)	同 宗兵衛	和 太夫	同 玉嶋平八	曾免太夫	海老 彌	半兵衛
灘屋喜八	喜 太夫	同 十右衛門	文 太夫	同 松山	嵯峨太夫	南部 彌	伊左衛門
堺屋弥兵衛	姫 太夫	大津治兵衛	千代太夫	播州室 又四郎	津 太夫	和泉 彌	勘四郎
塗師屋彦兵衛	伊豆太夫	同 久兵衛	浦 太夫	同姫路 勘七	萩 太夫	難波 彌	与左衛門
大和屋新兵衛	佐野太夫	同 孫兵衛	同 孫兵衛	同所 弥七	采 女	油 彌	喜兵衛

十三	善兵衛		善兵衛	姫路	太郎兵衛	長門	金兵衛
吹田	彦兵衛 〔十四才〕	鮫	三左衛門	近江	徳兵衛	播磨	太兵衛
藤井	治兵衛	毛馬	権兵衛		齋喜	出雲	治郎兵衛
伊豫	吉兵衛		勘三郎		織儀	八幡	長右衛門
池田	平十郎		金十郎	鯉	利兵衛	筆	半 〔七才〕
伏見	弥七郎	植下	市右衛門	備前	小兵衛	江ノ子	藤右衛門 〔十七才〕
京	与兵衛		宇兵衛	伊与	新 〔十六才〕	同	平兵衛
今津	善吉		久右衛門	筑前	与兵衛	淡路	源七
今宮	源兵衛	塩	源兵衛 〔十五才〕	桑名	三右衛門	錢	佐助
堺	吉兵衛		治兵衛	油	伊助	箱	伊兵衛
小嶋	孫兵衛 〔十四才〕	油	喜右衛門	小間物	新助	塗師	又兵衛
葉村	伊兵衛		治兵衛	播磨	長兵衛	下松	治郎兵衛
大和	六右衛門	宮古	利右衛門	御影	平十郎	岩井	吉兵衛
肥前	嘉兵衛	南部	勘兵衛	平野	嘉兵衛	紙	忠兵衛 〔十八才〕
川崎	甚兵衛	人見	六兵衛	牛窓	善右衛門	帶	久兵衛
和泉	平兵衛	永來	宗兵衛	柳川	吉右衛門 〔十七才〕	藍玉	五兵衛
三笠	喜兵衛	油	甚助	刀	孫兵衛	筑	甚兵衛
小嶋	平七	糒	茂兵衛 〔十六才〕	鮫	伊兵衛	河州平野	卯兵衛
八百	長右衛門	中村	治郎兵衛	神崎	吉兵衛	同所	源兵衛
長濱	勘七 〔十五才〕	加賀	勘右衛門	手綿	市八	同所	久右衛門

同三宅

此右衛門

田原

甚右衛門
〔十九ウ〕

同所

嘉兵衛

鹿

竹松

神戸茶

藤七〔十八ウ〕

土佐

十兵衛

讃州高松唐津

平兵衛

薩

又兵衛

豊前

長右衛門

万

判陸

同小倉

弥右衛門

中村

忠兵衛

備中笠岡吉文字

甚右衛門

塩

藤七

同所油

曾右衛門

河野

佐七

同所石橋

茂左衛門

松

久兵衛

同所

栄藏

尾ニ

清助
〔二十ウ〕

同所高橋

九左衛門

長門

小兵衛

同所輅

長三郎〔十九ウ〕

敷

半兵衛

同所大黒

幸八

松本

伊兵衛

同所古手

庄之助

源兵衛

千輔

同所

勘六

野口

可笑

三ツ田森

丹助

藝州

金藏

○鹿

宗兵衛

陸奥熊太夫
〔二十ウ〕

豊曲不二齋

『豊曲不二齋』序跋

越前少掾・肥前掾門弟教訓及び段物集。宝暦五年三月、越前少掾序並びに肥前掾序跋。大阪西沢九左衛門・江戸鱗形屋孫兵衛版。

序

夫音曲の道は神代の俳優人皇の来目歌をなん種として神詞催馬楽（そら）、豊曲朗詠の品々詩に興り、楽に成り本立て枝葉繁し、風流の調ものは変（へ）して猿楽早歌（さうが）、大柏（だいはく）〔四ウ〕、三ウまでは内閣（ないかく）共他、となり平家琵琶の糸筋は分れて大曲小曲、節教と成り祭文となる、往古の今様は今の古風にして今のいま様にあら、ず今のいまやうといへるは十二段の淨瑠璃にして、勧善懲惡の理をつらぬき喜怒哀楽（きどあいらく）、何ウの節をあやつり、調偏（てうへん）ならず、鄭淫雅俗千音万声をすべて呂律にもるゝ事なし、予が流義の骨髓は秘奥口伝有といへとも、能心がけ好む人は不中といへ共、遠からずしかはあれど師伝口授なき時は我意多ふして奥（おく）〔五ウ〕旨得る事かたし、各音曲に名を発とならば先一流の本末を弁え、開口清濁（きんぐくしやうとく）を専とし、心と位を知て曲を操り、序破急の程拍子をとる事、淨るゝ軍配の斯引なり、其音曲に七箇の戒をあぐるといへ共〔五ウ〕時に臨んで、応変の用捨有て可也、古き伝には稽古を嗜とし、公界を常とせよとい

へり宜なる哉爰に高弟豊竹肥前掾東都におゐて其業勤たりと謂へし
音曲の甚深秘奥多しといへども悉く伝授して才芸世に「余も鳴るい
でや此機に乗じて我が流の派を正し猥りなるを退け疑敷を去て門人の
姓名を連署せん事を累年もの語るといへとも良辰を定めず今正に時
至にや雁書を飛して此旨を告る愚老閑窓のつれ／＼を慰る」(六)事
偏に肥前か功なり猶門葉の梢繁く末葉栄えて千音万声の世に響く事
誠に不二の筈ならむと云爾。

豊竹越前少掾七十五翁識(七)

右元祖の述る所は音曲の奥義にして鸚鵡に喩をあづけ俗に響をゆ
づり繁きをかりて門人にしめすの至要也爰に豊竹を名乗の類数多あ
りといへども自己に二字を相掠扱は我意を以て名乗の族又はおほ
るげに「モウ枝葉を継て尊師豊竹越前少掾門人にあらず故に師伝口
伝に預らざれば音曲の秘奥意味の深長成事をしらず我は他をさみし
他は我を嘲或はおなじ流を汲といへども心口共に怨敵のごとし尊師
是を深くなげき」(八)其猥成輩を導引て教訓を加へ豊曲の栄えを
いのれと師の命おもしといへ共浪華の事繁きに東武まじしかなり
予壯年の頃より此道に意を徴し一度名を顕さんと誓て東都に趣き廿
二年の昔安座の春を迎へ「ハ」師の恩は百里遙かや筆始と歳旦せ
しにある人感じて其職をついで師恩を尊む意宜なり必冥加とをか
るまじといへるがごとく東都において此道の功を発す正に師恩のな

す所なれば尊師の意をおきなはんとすれ共「(九)片時の暇を求す
年月を送る時に暫退業の日間を窺此旨趣を興起事を浪花へ告るに高
師悦喜の余り門第帳の表冊式三番の図画正信是を贈り賜り猶我に代
て其猥なるを糾せよとの命によつて」(九)各の名印を取次新に許
し状を乞て是をあたへ集帳に加はる事誠職分をたつる規模ならずや
焉におゐて師恩のふかきを知らは百三十里隔つといふ共老師の機嫌
を窺ん事いそげは六日にいたる是孝道冥加の当然也」(十)直
第高師へ孝を尽さば枝葉を授継輩此心をもつて其師へ孝心を
運ばざらんやさもなくして師弟の道をうしない不行跡有において
は二字を取上板行を削り集烈をはぶくもの也予が意を継人あらば
むかし昔に「(十一)成行共おなじ流を汲輩師命を先とし意を降ま
じうして此門にころろさす人はおひ／＼名印を板に頭はし集冊の栄
えをねがふさあらば豊曲ます／＼さかんにして師恩を謝す冥加なら
めと依て題して不二の筈と響物ならまし」(十一)

豊竹肥前掾

宝曆五乙亥歲春花月吉旦

「(十二)」

浪花元祖豊竹越前少掾

直門弟之分

堺 嶋 太夫

(以下、各上段ノ終リニ各下段ノ初メヲ懸ケテ讀ム)

座元

肥前掾

豊竹座

仙太夫

東巴

豊竹播磨太夫門弟之分

北新堀

岸太夫

浪花豊竹若太夫門弟

香子

伝馬町

加納太夫

豊竹座

文字太夫

豊竹座

阿曾太夫

乙井

〔十四ウ〕芝口二丁目

卯多太夫

堀江町

喜美太夫

浪花豊竹新太夫門弟

一夏

京橋

美野太夫

住吉村

播磨太夫〔十二オ〕神田

因幡太夫

浪花町

求馬太夫

馬喰町

雅楽太夫

芝三嶋町

主馬太夫

小石川

皆太夫〔十三ウ〕

堀江町

戸志太夫

立大工町

喜佐太夫

下谷萱町

志賀太夫

浪花豊竹嶋太夫門弟

糒町

喜佐太夫

下野小山

明石太夫〔十六ウ〕

山本

津源

日本橋二丁目

長門太夫

飯田町

力太夫

豊竹主馬太夫門弟

三和太夫

豊竹座

佐野太夫〔十二ウ〕

是ヨリ東都之部

堀江町

左馬太夫

三嶋町

三和太夫

浪花太夫豊竹筑前少掾

豊竹文字太夫門弟

品川

友太夫〔十五ウ〕

豊竹肥前掾門弟之分

忠輔

門弟の分

拾間店

礪太夫

三田

喜久太夫

本石町

品太夫

西川岸

薩摩太夫

瀬戸物町

女文重

旅

勝太夫

喜代太夫

柳枝

伊勢町

吟太夫

日本橋

清九郎〔十四ウ〕

壺場町

都太夫

平右衛門町

仲太夫〔十六ウ〕

鉄鉋町

園太夫

豊竹喜美太夫門弟之分

旅

喜尾太夫

豊竹座

井筒太夫

当時出勤之分

岡太夫

水桂

旅

房太夫

堀江六間町

若狹太夫

豊竹座

伊勢太夫〔十三オ〕

伝香

鞘町

喜曾太夫〔十五ウ〕

御屋敷

木母

小伝馬上町	三保太夫	下野小野寺村	喜代太夫	三河町	濱太夫	東波
一ヶ谷	伊織太夫	小石川	正木太夫	本所四ツ目	諏訪太夫	旭波
御屋敷	豊光	遠州	源太夫	米沢町	筑波太夫 (十九ウ)	かなめ
白壁町	式太夫 (十七ウ)	日本橋	女紅橋	豊竹仲太夫門弟之分	堀江町	松花
浅草東中町	折太夫	本所中之郷	敦賀太夫	豊嶋町	林太夫	豊柳
鉄砲町	吾妻太夫	長谷川町	式部太夫	久右衛門	澤太夫	女柳 (二十一ウ)
吉原	喜点	箱崎	茂世太夫 (十九ウ)	八名川町	近江太夫	松峯
尾張町	登喜太夫	神奈川	岑太夫	羽州	龜曉	久里
麴町	和井	本石町	孫兵衛	佐久間町	八十太夫	梅風
麻布	采女太夫	並木町	喜利太夫	馬喰町	喜久太夫 (二十ウ)	枝竹
川越	伊太夫 (十七ウ)		雨井	豊竹井筒太夫門弟之分	本材木町	照波
麴町	藤太夫	新乗物町	小野太夫	下谷竹町	井伏太夫	可朝
増上寺片門前	豊太夫		南斎	芝露月町	常盤太夫	魚 (二十一ウ)
四谷	伊世太夫	高輪	千代太夫 (十九ウ)	馬喰町	馬久太夫	古郷
神田鍋町	万太夫	三河町	巴	数寄屋町	藤太夫	松翠
並木町	鶴太夫	品川町	久米太夫	下谷竹町	萩太夫	左橘
房州	伊賀太夫	三嶋町	齋宮太夫	小石川	桐太夫 (二十ウ)	右橘
並木町	歌門太夫 (十八ウ)	深川	幸七	奥州	羽嶋	蝶波

九間町代地

山本 波丸 同所 女右紅

豐竹伊織太夫門弟 風蝶 豐竹伊勢太夫門弟之分 勢花

物右衛門 豐竹若狹太夫門弟之分

青山 秀太夫」(二十四) 淺草猿屋町

伊广太夫

茶升 甚左衛門町 造酒太夫

豐竹式部太夫門弟 橫山町 對馬太夫

小傳馬町

豐勢 代々太夫

玉波 大傳馬町 伊豫太夫

豐竹薩摩太夫門弟之分 辰松座

御屋鋪

女霞光

松七 數寄屋町 志津太夫」(二十一)

須磨太夫 小石川

勢波」(二十六)

春波 神田鍋町 美濃太夫

和太夫 御屋鋪

女勢枝

秋波 芳町新道 佐馬太夫

淺竹三好町 輝太夫

金砂

京定」(三十二) 新右衛門町

上槇木町 梅太夫」(二十五) 三田臺町

鳴戸太夫

女豐波 高砂町 美根太夫

白壁町 浦太夫

芝西應寺町

常太夫

女吟波 平永町 常太夫

堀江六間町 佐渡太夫

神田

哥勢

吉野太夫 本材木町 芳太夫

旅 佐馬太夫

音太夫

女梅枝

龜州 花向」(三十四)

旅 音太夫

本數寄屋町

女虎勢」(三十六)

和扇 扇歌

本小田原町 明石太夫

佐渡太夫

岸満

松曉」(三十一)

戀花 浪花豐竹越後太夫門弟

虎館

女左紅 里松

長谷川町新道 鶴歌太夫」(三十五) 京橋

伊曾太夫

本庄 子子子 白銀町 宇治太夫

乗物町 伊賀太夫 豊竹常盤太夫門弟

芝 文路（二十七才） 芝 沢太夫（二十八才）

本石町新道 女幾勢 豊竹斎宮太夫門弟

芝新馬場 翠露 白銀臺町 可津太夫

同所 鯉走 芝三嶋町 熊吉

同所 雨晴 豊竹因幡太夫門弟

靈岸嶋 荷柳 幾鳥

馬喰町 伊久太夫 龜鶴

本町 歌柳（二十七才） 龜山（二十八才）

豊竹岡太夫門弟

人形町 鼠傳 源川六間堀 淀太夫

富沢町 夜菊 花房町 雪口

豊竹園太夫門弟 大門通 今太夫

南傳馬町 猶太夫 豊竹文字太夫門弟

下谷 半太夫 傳馬町 金

曲（二十九才）

跋

右之旨題目出度成就して吉日を撰集冊と成時に享保十六年に當つて元祖豊竹翁浪華におゐる常盤の御といへる門弟帳集冊出来有かたや今東都にいたり豊曲感催少からずしかも此門多し依て件の一ツ集を撰不二の御と題するは東都に（三十才）限ゆへなれば也また云當時豊竹を名乗下り太夫あまた有といへども浪花の住居ゆへに望ざるは此集帳に除もの敷序にいへる此一ツ集おこす事師恩を謝す一助にして外に子細なし只豊曲元祖翁の流をくむ我々なれば其源を忘れず枝葉を受継人々師恩の二字をおろそかにし給ふなとめすのみ元より愛縁奇縁（三十才）轟川びるきによる此道なればこのむ風を師と頼集入の望あらば其師をもつて我に告給へ日々撰月々に改板して集帳にのする予是を撰に出銀音物を不請集連の満て榮をもつて老師の徒然を補なれば東都の此集連一様におのづから師恩を謝基ならん歟此集にもれたる族あらば名字を奪の類にして誠の（三十一才）豊竹にあらずしかれば故なきに表札を出すにおいては堅是をけづるもの也此外に述事なしよしなきらんふんかんいらざるものかなり

宝曆五歲乙亥弥生吉旦

浪花元祖豊竹越前少掾高弟

東都御操座 豊竹肥前掾藤原清正岡町（三十一才）

『音曲初日山』序

竹本・豊竹派段物集。宝暦年間刊。大阪糸屋市兵衛版。

情中に動き言外に形る是を号て歌といふ情物に転じ言品を分つ是を号て淨瑠璃といふ其曲調開合の精ものは竹本豊竹の二流にとゞまる此道を嗜んには第一に字詠を覚へ文句の意を弁へ貴賤老若の位を定め序破急をわけ拍子を能とるべし古人も稽古を嗜とし公界を常とせよといへり故に道行景事の品々を撰集稽古励の備となすのみ(序二ウ)(すより二オまで目録)

『音曲莠大全』序

竹本・豊竹派段物集。園性万里軒序。宝暦初年頃刊。大阪糸屋市兵衛版。

序

夫音曲は情心の美なり依て得生なるを本とす故乙越を定規として六甲をはどこすべし雌音を誘て十二の調声を催すは稽古鍛煉の足畢所歟是に随つて甲乙のはこびを意得序発急の程位を委て其熟したる音節を持てあるひは他の耳を慰め且は自情の鬱を散するを徳せざらむやしかならばあだ口にも是をそるにすべからず先字を「(序一オ)訓て文句の意味をさとし故事は重く世話は軽く貴賤老若の詞それ

く「にわかにざればたとひ声いづくしきとも宛幼童の笛吹にひとしかるべし昔より淨瑠璃の諸流ありといへ共其嗜詳ならざるはすたれたり其曲調開合の精竹本豊竹の二流榮発せり故に文段多中にも道行景事節事の品々を撰集莠大全と号て稽古励みの一助に擬する事も偏に治世の英也といかいふ 園性万里軒述「二ウ」

『競伊勢物語』序

奈河亀助作「競伊勢物語」序。安永四年四月、亀助序。大阪大津屋溝口治郎右衛門版。

凡語の文句は実を虚につぐり淨瑠璃哥舞妓の趣向は虚を実にのぶるいづれ勸善懲惡の一助ともならん事を本意とす且歌舞妓狂言の作意に趣向の古と新しき評はあれども立役の難義する軋を見てはうれひ敵役のほろぶ軋を見ては快然がことは古今相おなじ其見聞正直の心にすかつて不都合のせりふに故人妙作の文をかりまじへ木に竹をつぎく五段の綺語をあらはす是なん扮人擬語の稿とも又は淨瑠璃に似ものとかいはんよつて此道の数奇者たらざるを増多をはぶき宜曲節而各其妙音にのせかり給はらば戯場に勢をますの本望ならんかしとひたすら一座の勸に応じ所詮予が管見短才を梓にてらして御笑ひを申請るものならし

安永四乙未年孟夏日 狂言作者 遊泥居識

奈河 亀助 「序一オ」

『音曲八の巻』跋

越前少掾十三回忌追善淨瑠璃。安永五年七月廿九日、此太夫跋。

金石絲竹匏土革木の八音は物のよく鳴もの也故豊竹越前少掾壯なる歳より螢雪窓に魂を委一流の藝に遊ぶ妙音は十二の呂律にかなひ一度声を発する則んば梁の塵を揺し皆人感慨をなす因て梁塵軒とよべり古稀の齡も致仕の歳に至て懸車を辞し退居の砌老阿限有て亡人の員に入りぬ予拙くも其門に入て採薪汲水の折／＼答れし杖の下には開合を聞坐臥の膝に仕ては章句墨譜の秘伝を授り難行苦行歳在て茲歲此秋一十三回りの辰に向ふ追福の徴志を以て師恩の報ずるもの歟

問ふまでのしるしや露の玉祭」十三ウ

豊竹此太夫述

『音曲大湊』序

竹本・豊竹派段物集。安永六年正月吉祥日、川四軒呉調序。大阪勝尾屋小林六兵衛版。

夫音曲は来より出て十二の調四声を分ち文字の甲乙を結て廿五弦小詩を調ひ文を調ふ我國は和らかなるを本として十三弦に長歌短歌を遊宴の友とし琵琶の四絃にしらぬ昔語自然と鬼神も感応する事誠に音曲の微妙也其流を汲で今は三絃の糸竹に各人数多有中に竹本豊竹が風流音声を巧にし善く美し涙の真砂のかずつきぬ景事（序一）ふし事都鄙遠境の月雪花に色添るされば世に集る処の書多しといへ

ども予が再板する此一集は東西諸名人の秘曲を尋ねもとめ此道好士の一助ともならんと大字ひらかなをもつて六くだりに書写し新物古物のわからなく寄あつめたる大湊は猶末広に繁昌

安永六歲

酉正月吉祥日

川四軒呉調述」二ウ

『矢口荒御霊新田神徳』跋

後日 福内鬼外作「荒御霊新田神徳」後序。安永八年二月八日、鬼外跋。江戸山崎金兵衛・伏見屋善六版。

後序

近松老翁世を戯場に避て数の淨瑠璃を作るに筑後播磨の名人有ツて普く世上に行渡り勸善懲惡世を教るの一助たる事は近松氏の本心なり中頃千前軒文耕堂が類も亦近松氏の意を請て作れる所正しければ此道甚盛なりしがいつの頃よりか衰て今時の作者は固そこ所ではなく文法をしらず手爾於葉を「一敗一弁へす嘲を遠近に伝へ恥を千歳に残す読め同土書ぬ同土金鼈雷をこはがらず盲蛇物におぢすされども五年か三年に一度犬も歩行ば棒に逢ふ闇夜の鉄炮まぐれ当りはくらんの薬ははくらん病が買に來る運牛も淀早牛も淀それも作者是も作者鷹か飛で飛で見たがる石龜仲間のじだに組すつへらばんの隨作者泥水に足を踏込首をすつこめ敬白

亥のとし卯月上旬

福内鬼外書」二ウ

◆一つの会を成立させることは極めて困難な事柄である。とりわけ、個性的な会を編組するには当事者はなみ／＼ならぬ苦を味わうことと思う。

この会はそれにくらべてごく自然にしかも性格のある会として成立した。主に我国古典演劇研究を志す人々が、内よりの要求に従って一つの会にと進んでいった。我々はこの会を等しく要望していた。いや、この会の目的たる共同研究の必要性を感じていたといえる。会を生むことの苦しみ以前に、我々の等しく味わってきた苦痛の数々の故に、我々はこの会を勞せずして作りあげていった。身近かな人と人の呼びかけで十分であった。

この会にはくどくどしい会則を要しない。たゞ共同の研究によって、早急に解決すべき諸問題を逐次克服するのみである。会の組織も不要である。たゞ平等の立場で仕事をしてゆくだけである。従って年令、學閥を超えて集う人々が同じ立場で仕事を行うことが、この会の性格となった。今後会員が増えることもあろう。が、我々はこの目的の為に平等の仕事をあえてして下さる人々であれば、喜んで入会して頂きたいと考える。

演劇研究会と名付けるこの会はそうした会である。

◆我々は以前より、共同研究の極めて行いたいものであることを熟知している。従つてこの会に於ても、その可能の場を求めて幾度か討議を重ね、凡そ二つの方向を旨指すことに落着いた。その一つは資料整理の共同作業を行うことであり、また一つは共通に関心を持ち得るテーマの共同研究という方向である。前者については我々の等しく痛感していた事柄でもあり、この会の性格と相応じて発足以来順調な道を辿つた。このさ／＼やかな冊子は会員の勞力と費用によつて、生れ出た一つの結実であり、我々の力の及ぶ限りこの仕事は永く続けてゆきたいと考えている。また後者についても、我々は数回にわたつて会員の研究発表とその討議の集いを持った。さきの資料整理と相まって、この方向に於ても程へずして発表の機を持ち得るようにまで育つものと確信している。その為にも大方の御支援と御示教を願う次第である。

会 員

池谷 優	大竹 文子
信多 純一	諏訪 春雄
津田 道夫	土田 衛
角田 一郎	丸西 美千男
源 高根	向井 芳樹
森 修	柳 原玲子
山本とも子	山根 為雄
祐田 善雄	横山 正

昭和三十三年五月十五日発行

未刊淨瑠璃芸論集

演 劇 研 究 会

大阪市西淀川区
姫里町一ノ三一
振替大阪 四四〇七七

印刷所

京都刑務所印刷部